

愛し方を知らない孤独な銀狼

鎌鼬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気がつけば歩くことを強制されていた二度目の人生

だが周りからの向けられるのは嫌悪と拒絶

手を差し出してくれる者はあるがそれよりも彼を拒絶する者の方が多い

果たして彼は嫌われ、拒絶される人生の中で忘れてしまった『愛し方』を思い出すことが出来るのだろうか？

この小説にはアンチを煮詰めて濃縮したアンチが使用されています。原作キャラがこんなことをするなんてあり得ない!!とか思われるかもしれないですがこの小説ではあり得ます。なので合わないと感じられたら即座にバックすることを勧めします。

.....お願い.....  
.....僕を.....  
■ ■  
.....して.....

第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
161	152	145	136	123	116	107	97	87	77	65	57	50	41	32	23	15	8	1

目次

## 第1話

昔語り、と言うわけではないが僕の人生について語ろうかと思う。それは生まれ直してから九年たった一区切りなのか、それとも何が起きそうだと言う予感から来たのかは知らないし、知りたいとも思わない。

僕は普通の生を歩んでいた。

普通に生まれ、

普通に育ち、

普通に学び、

普通に愛され、

普通に人を愛し、

普通に家庭を築き、

普通に子を愛し、

普通に老い、

普通に逝った。

その一生には悔いも未練もなく、客観から見れば普通でつまらないとヤジを立てられるような物だったかもしれないけど、僕にとっては満ち足りたと言える一生だったことには変わらない。

そう、だったのだ。

間違いなく僕は死んだはずだ、老衰という普通の死ではあったがあの心臓がゆつくりと止まる瞬間は今でも思い出せる。

そうして死んだはずの僕は気が付いたら赤ん坊になっていた。仏教で輪廻転生という言葉があるのは知っているが記憶を持ったままというのはあり得ないはずだ。もしそれが一般的になっているのな

らこの世は前世の記憶持ちで溢れかえっているだろうから。そうして目を開けた時に視界の中にぼんやりと見える二人の人影が見えた。知らぬ人間であるはずなのに感覚的にこの二人が僕の親なのだと分かった。そしてその人影の一人が僕に触れ—————一杯、地面に叩き付けた。

打ち付けられた衝撃はあったものの、それよりも混乱が先に出てきた。親というのは無条件で子を愛し、守る存在である。そうされてきたと覚えているし、僕もそうしてきたから間違いいではないはずだ。

しかし、目の前に映る二人から吐き出されるのは罵詈雑言。

気持ち悪い

臭い

汚い

言っているのはそんな意味の言葉、愛をもって作り産み出したはずの子供を否定する呪詛だけ。

そんな親にまともに育てられるはずもなく、僕の二度目の人生はその半分を押し入れの中で過ごすことを強要された。病院らしき場所から移って押し入れの中に入れられ、小皿に入れられた牛乳が置いてあった。何があつたのか理解できなかったが、一度目の時に味わった死の感覚を味わいたくないと暗闇の中で必死になって這いつくばりながら小皿を探り当て、牛乳を啜った。

時間がたつて空腹を堪えているときに押し入れの扉が開き、空になった小皿を見て舌打ちされたのは忘れられない。

自分でもどうして生きていられるのか分からない状況だったがそれでも二年、それで生き延びた。

そしてそこから生活が変わる。

ある日押し入れの扉が開き、無理矢理そこから外に出されて――――殴られた。暗闇に慣れた目ではまともに見ることも出来なかったが大人の拳だと分かった。

親の顔すら覚えられず、

日の光も見ることができず、

押し入れの扉の隙間から差し込む光は僅か、

知ってる世界はこの暗闇、

与えられる餌は腐った物だけ、

親から与えられたのは暴力と罵詈雑言、

そんな生活を三年、合計して五年はこうしていた。

すべてを否定されてまともでいられるほど僕は強くはない。前の人生で作られた精神は一度崩壊してしまった。

そしてあるとき、同じ服を着た人間が沢山やって来て僕を殴っていた二人を取り押さえていた。どうやらどこかから通報があつて児童虐待の罪で逮捕しに来たらしい。

そうして僕は親だった二人から離れることが出来たのだが………問題となったのは僕の扱いだ。精神が崩壊したことで脱け殻のようになつた僕は警察に一時的に保護されることになつたがやはりここでも親だった二人と同じように拒絶された。直接的な暴力が無かつただけかもしれませんが明らかな嫌悪の目線と影で囁かれる罵詈雑言はあそこと同じだった。

そんな僕を引き取ろう等という者は居らず、孤児院に引き取られる







何を言ったのか、それは今でも思い出すことは出来ないし、シスターに聞いても教えてはくれない。だけど僕はこの日、二度目の人生の中で始めて、温もりに触れなから眠ることができた。

そうして僕はシスターに引き取られ、その教会の神父様と他の孤児院の子供たちと出会った。誰からも嫌悪され拒絶されていた僕だったがみんなは受け入れてくれたのだ。そして彼らと過ごす内に精神は安定し、崩壊した人格は元と同じとはいかないが再形成された。彼らに出会えなかったら僕はどうなっていたのか分からない。

彼らに出会って四年経ち、僕は九歳になった。義務教育が始まって学校に行くことになるのだが………僕は行くつもりは無かった。どうせ僕が行ったところで嫌われるだけだと分かっているのだ、その事が分かっているのに自分から進んで行くつもりは無い。そんなのに自ら進んでいくのはマゾヒストだけだ。現在小学三年生だが一学期目の最初の日だけ顔を出してそれで後は行っていない。出席日数関係無く進学できるから義務教育万歳である。

そして今は三年生となって始めての日、だから学校に出ているのだが………向けられるのはすべて嫌悪と拒絶の目線だけ。気持ち悪いと分かっているのなら無視して騒いでいけば良いのにわざわざ僕に聞こえるような声量で話しているのはわざとなのだろう。

クラスの担任が現れて席に座る全員を見渡す

がー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。やはり向けられるのは嫌悪の目線だった。学校側から登校拒否について渋ったから出てきているのにその対応はどのようなだろうか？彼女と同じように通信教育にした方が良くないかもしれないが………。学費を出してくれている神父様やシスターに迷惑になるからしたくない。

担任の指示で生徒たちが自分の席から立ち上がって自己紹介を始めた。だがその中で明らかに格好つけた様な名前が多かったのは親がそう決めたからなのだろうか、それとも最近流行りのキラキラネームというやつなのか。子供の頃は良いかもしれないが大人になってから苦労するのだろうか。

そして僕の前にいたキラキラネームの生徒の自己紹介が終わって僕の番になる。立ち上がる動作をただで嫌悪の目線が強くなったのが感じられる。

「……………如月神楽」

自分の名前だけを告げて席に座る。不快にさせると分かっていたから最小限で済ませたというのに周りからの嫌悪の目線は強くなるばかりだ……………どうしろと言うのだろうか。

早く帰りたいたい、そう思いながら後ろで自己紹介を始めたキラキラネームの言葉を聞き流していた。

## 第2話

「ただいま〜」

今住んでいる海鳴の町に立てられた教会、そこが僕の家であり、僕のことを引き取ってくれた神父様とシスターが勤めている場所でもある。信者用の礼拝堂のある正面ではなく住んでいる者たち用の裏口から住居スペースに入る。

「あら、お帰りなさい」

「ただいま、シスター」

帰ってきた僕を迎えてくれたのはこの教会のシスターであるリザ・トリファさん。重たそうな本を積み重ねて運んでいるところで僕に気がつき、わざわざ足を止めて声を返してくれた。

「その本は……………また神父様の？」

「そうなのよ、あの人ったら珍しい本を見つけたらすぐに買ってきて……………もう書齋の棚は一杯なのに」

「今どこにいるの？」

「礼拝堂よ。良かったら顔見せてあげて」

「元からそのつもりだよ」

シスターから神父様の居場所を聞いて信者用の礼拝堂に向かう。礼拝堂に入るとなんとというか締まった空気が出迎えてくれる。やはり宗教の中で神に祈りを捧げる場所というのはこういう物なのだろうか。

礼拝堂の奥に置かれた祭壇の前で、膝をつきながら祈りを捧げている男性がいた。祈りを邪魔するのは失礼だと思うので祈りが終わっ

たタイミングを見計らって男性に声をかける。

「ただいま、神父様」

「ああ、神楽君ですか。お帰りなさい」

僕のことには気が付いた神父様が柔らかい笑みを浮かべながら返してくれた。この人はこの教会の神父のヴァレリア・トリファさん。名前前から気がつくかもしれないがシスターとは夫婦である。

「聞くまでも無いと思いますが一応念のため、学校はどうでしたか？」  
「分かりきったことを聞かないでよ……いつも通り、誰も彼もが嫌悪の目で僕のことを見てたよ。いつまでもあそこにいたら何されるか分からないから速攻で帰ってきた」

「そうですか……悲しいですねえ。こんなに可愛らしいというのにどうして周囲は貴方のことを嫌うのでしょうか？」

「分からないよ、でも宗教的に言ったら神から与えられた試練とかなのかもしれないね。その時は神殺しも厭わない所存だけど」

「ハハハ……私とりざ以外の宗教家の目の前では言わないくださいいね。中世だと異端者と言われて処刑されてもおかしくないですから」

「そう考えると宗教ってホントキチガイだよ、別の神や神を馬鹿にするようなことを考えるだけで殺されるとか」

平和な今の世の中では考えられないが宗教が国並みの権力を持っていた頃なんて異端者狩りが普通だったはずだ。意見が合わなかっただけで殺すとか宗教マジキチガイ。

「ただいま」

「ああお帰りなさい、テレジア」

「お帰りなさい、レア」

神父様と話しているときに後ろからひよつこりと現れたのは神父様とシスターの娘のテレジア・トリファ。年は僕の一つ上で僕ともう一人は彼女のことをレアと呼んでいる。あだ名みたいな物だ。

「神父様、神楽、お母さんが呼んでる。御飯出来たって」

「テレジア、いつも言っていますけど私のことは『お父さん』と呼んでください。もしくは『パパ』でも可です」

「嫌」

「おうふ……………」

「一言で撃沈……………相変わらずレアは口がキツイね」

父親なはずなのにいつまで建っても神父様呼びされている。シスターは母親呼びなのにどうしてだろうか？撃沈している神父様を置いて食堂にレアと食堂に向かっていている時に気になって聞いてみた。

「ねえレア、どうして神父様のことをお父さんと呼んであげないの？シスターのことはお母さんって呼んでるのに」

「……………だって、恥ずかしいから」

恥ずかしそうに頬を赤らめて呟いたレアの言葉は嘘を言っているように思えなかった。神父様が聞いていたら狂喜乱舞していただろうがこの場にいるのは僕だけ、そして僕はこの事を神父様に伝えるつもりは無いので事実レアが伝えようと思わない限り神父様に伝えることはない。

「乙女心っていうのは複雑だねえ……………」

「えっへん」

「いやいや、そこ胸を張るところじゃないから」

そんなことをしながら食堂に着くとテーブルの上に並べられた料理、そして料理するために着けていたであろうエプロンを畳みながら

台所から出てくるシスターと車イスの少女の姿があった。

「あつ神楽君、レア、お帰り」

「ただいま」

「ただいま、はやて」

車イスの少女の名前は八神はやて、両親が事故で亡くなって親戚もいなかったために引き取られた少女である。年は僕の一つ下だが今年の六月に誕生日なのですぐに追いつかれることになる。僕とほぼ同時期に引き取られた嬉しくない同期でもある。

「へえ、今日ははやても作ったんだ」

「そうや、うちは足がポンコツで動かせなかったから行けなかったけど新学期やからな。そのお祝いや」

「はやてとお母さんの料理は美味しいから好き」

「まったく、テレジアも早く覚えた方が良いわよ」

「お、お湯注いで作るのなら完璧だから……………」（震え声）

「レア、それ料理とは言わないよ」

足が使えないというハンデを持っているが家事を完璧にこなせるはやてに対してレアは家事が出来ない。いや、出来なくはないが一人でさせたら酷くなるのが多々あるのだ。なのでレアに家事をさせるときには僕と一緒にすることになっている。その為かレアを差し置いて僕の家事スキルはメキメキ上達している……………悲しいなあ。

「そう言えばヴァレリアは？一緒にいたのでしょうか？」

「神父様なら礼拝堂でうちひしがれてるよ。レアの口撃で」

「はあ……………あの人ったら、いつまで経ってもメンタル弱いんだから……………呼んでくるから少し待っててね。遅くなるようなら先に食べていいから」

そう言つてシスターは食堂から出ていった。残されたのは僕ら三人とテーブルの上に並べられた料理。だけど誰もそれに手をつけようなんて考えていない。基本的にこの家ではどうしても外せない用事でも無い限りはみんな揃つて食事を取るようになっているからだ。誰かが決めたという訳ではないが自然とそうしている。

「にしても作ったね。はやてはどれを作ったの？」

「このサラダと生姜焼きと海老フライやな、後は全部リザさんが作ったで。レアも作れるようにならないけんな」

「ぐぬぬ……………これで勝つたと思うなよ」

「もう勝負着いてるから」

その後、シスターが頭にコブを作った神父様を連れてやつて来たので食事を始めた。はやてが作った料理もシスターが作った料理も、どれも美味しかった。

「私の鋼牙に跪くがいい」

『ウライインベリリア帝国万歳!!』

「クツクツク!!うちの逆十字に勝てると思ってるんか!？」

『俺の糧となれ』

「よろしい、ならば僕は魔王となつて試練を与えよう!!」

『我も人、彼も人、故対等基本であろう?』

食事を終えた僕たちはテレビの前を陣取つて『戦神館シリーズ』と



呼ばれているゲームをしていた。ジャンルはよくあるような格闘ゲームだがそのキャラの個性が良いとの評判のゲームだ。レアは鋼牙と呼ばれる銀髪の少女、はやては逆十字と呼ばれる細身のスーツの男性、僕は魔王と呼ばれる軍服の男性を選んでトーナメント形式の対戦をしていた。

プレイヤーよりもNCPの方が多いのでNCP同士の試合も当然のように出てくる。それを飛ばすことも出来るのだが今日は飛ばさずに観戦しておくことにした。

「ねえねえ神楽君、どうしていつも魔王使つとるん？他のキャラもあるんにどうしてや？」

「それは私も気になった。教えて」

「ん〜？そんな考えたことはないけど……………」

テレビの画面で殴りあっている金髪ガングロの男性と制服を来た少女の試合を見ながら僕が魔王をよく使っている訳を答えた。

「魔王つてさ、人間大好きじゃん。この人なら僕のことを嫌わないでくれるんじゃないかって思ってたさ……………それから愛着湧いて使ってるんだ」

魔王と呼ばれる軍服の男性は人間をどこまでも信じ、そして愛していた。そんな彼なら僕のことを嫌わないでくれるんじゃないかと思っていた。理由にしてみたらそれだけのこと。でも、この家の人たち以外から嫌われている僕からしたら例え想像の人物であっても可能性があるならすがりたいと思ってるのだ。

「……………神楽君」

「……………神楽」

僕の答えを聞いたレアとはやてが左右から僕に抱き付いてくる。他人から拒絶されるだけの僕を二人の温もりが包んでくれる。

「安心して、うちは神楽君のこと嫌いにならへんから」

「私も同じ、神楽のこと嫌いにならないから安心して」

「……………ん、ありがとう」

他人に触れる機会があるとしてもそれは殴られる時だけ、他人に語られる機会があるとしてもそれは罵詈雑言を吐かれる時だけ。だから、そんな僕を優しく抱き締めてくれ、そして優しい言葉をくれる二人の気持ちは言い表せないほどに嬉しかった。

「……………あ、はやて、逆十字が盲目打ちにフルボッコにされてるよ」

「え?……………つてああ!!うちの逆十字があ!!おのれ盲目打ち!!」

「ざまあ」

「あれ?レアの鋼牙の試合つてはやての前じゃ無かったっけ?」

「……………フア!?!」

なんとか盛り返そうとはやては努力したものの、流石に七割削られた状態からでは勝てるわけが無くはやての逆十字は負けてしまった。試合表を見るとレアの鋼牙は顔芸と呼ばれる女性キャラに負けていた。

二人が同時にやり直しを要求してきたので僕はそれを受け入れるしか出来なかった。

### 第3話

「ふう……………」

誰もいない夜の砂浜を歩く。無条件に他人から嫌われ拒絶される僕が堂々と出歩くには夜しか無い。これは神父様とシスターに引き取られて精神が安定してからの日課でもあった。

小学三年生になって四月も終わりに近づいて来たが僕の生活は変わらない。始めの日にだけ学校に行つてそれ以降は家に籠つて神父様やシスターの手伝いをしている。世間一般からしたら不登校だと思われるかもしれないが僕のことを分かっている二人は無いも言わないでくれる。

まあ……………時折僕のことを学校に通わせようと自称友人たちが群れをなしてやって来るのだがあれは何なのだろうか？こちらのことを考えているのなら辞めてほしい、徒党を組んでやって来るとか何なんだろう。毎日朝夕に飽きもせずやって来て……………その内夜の間も教会の前にいそいで怖いんだけど。

「やっぱり夜の海はいいな……………うん？」

砂浜を歩いているとそこに蒼く光る何かを見つけた。気になって近づきそれを拾ってみると蒼い宝石だった。

「宝石？どうしてこんなところに」

落とし物、という訳では無さそうだ。となると波に運ばれて流れ着いて来たのか。持ち主がいらないようなら貰っておこう。

「つてあれ?..まだあるや」

少し離れたところにも拾った物と同じ宝石が落ちていた。それも拾い、もしかしてと思っしてしばらく探してみたら他にも宝石が見つかった。

「五個も落ちてた.....みんなで分けられるね」

結果拾った宝石の数は五つ、僕を含めた教会のみんなで調度割り切れる数だった。これは調度いい、みんなで分けて大切にしよう。

思わぬお土産が出来たことで少し浮かれ、鼻唄を歌いながら家に帰ることにした。

「ふんふふ〜ん♪ふふ〜ん♪ふー~~~~~~~~ツ!？」

教会に帰る途中の道、住宅街ではあるが人に会わないように人気の無い道を選んで通っていた時、全身の毛が逆立つようなざわついた感覚を味わった。

「何か.....来る!？」

それは僕のこれまでの経験が産んだ危険察知能力とも言える。前に歩いていたら時にこの感覚に陥った時にその場から慌てて離れ、翌日にニュースで僕の通り道の直ぐそばの家で強盗殺人があったと流れていた。あの時のことを考えると何かが起きようとしているのではないかと思えなかった。

全力で走ってその場から離れる。100m、200mと息切れするまで走ったがざわつきは治まるどころか大きくなっている。体力が持たないと判断して近くにあった公園に駆け込んで、穴だらけの遊具



崇り神モドキのいた場所には刀身が捻れた一本の剣、それと砂浜で拾った物と同じ蒼い宝石が落ちていた。あれが崇り神モドキを押し潰した？ってか今の世の中で剣って!?

「思念体の除去完了つと。思っていたよりも弱かったな」

『お疲れ様ですマスター』

そして……………上から赤い服を着た色黒の少年が降りてきた。今あいつ上から来たよね!? 今日の前で起きてるのが現実なのかどうか分からなくなってきた。

「つたく、モブ風情がゴチャゴチャうるせえんだよ。俺こそが真のオリ主だって言うのに脇役風情が粋がりやがって」

『そうです、私のマスターこそが主人公ですのに』

あそこにいるのは一人しか見えないのに声は二つ聞こえている。ホントもう泣き出してしまいたい、涙鼻水垂れ流して顔をグチャグチャにしてみたい。でも我慢だ、ここで泣いたらあいつにバレる。あいつの目的は僕じゃなくて崇り神モドキのはず、だったらこのまま見つからなかったら襲われないはずだ!!

「さて、これでジュエルシードゲットだな」

『待つてくださいいマスター……………背後にジュエルシードの反応、数は……………五つです!!』

ざわつきが、あの崇り神モドキが現れたときよりも強くなり、反射的に地面に倒れこむ。そして感じたのは突風、そして破壊音。顔を上げてみれば……………僕が隠れていたはずの遊具は跡形もなく消えていた。

「————は？」

「ツチ、てめえかよ」

『マスター……………あれは何ですか!?何故あんなにまで不快感を感じさせる生き物が生きているのですか!』

「知らねえよ、ただの不登校の奴だが一目見たときからあんなのだった……………そうだ、いいこと考えた」

黒塗りの弓を持った色黒の少年が顔を醜く歪ませる。

逃げなければならないと頭は分かっているが、体は金縛りにあつたかのように動かなかつた。

「本当だったら触れたくもねえんだが……………光栄に思えよ?オリ主であるこの俺の手を煩わせるんだからよお!!」

「ガハッ!」

色黒の少年が僕に近づいてきて蹴ってきた。同じ子供の蹴りとは思えない大人のような重さの蹴りが腹に突き刺さり飛ばされる。

「ウェツ!!ゲボツ!!」

「さて……………その目にするか」

腹を蹴られて苦しんでいる僕に少年が近づいてきて眼帯を取り上げられ……………潰された目に、あの崇り神モドキが残した蒼い宝石を振り込んだ。

「ああ————?ああ————」

「あああああああああああああああああああああああああああき」

「ハッハッハア!!喜べよ!!無くなった目の代わりをくれてやったんだ!!そんでさつさと暴走体になりやがれ!!オリ主であるこの俺が華」

麗に倒してやるからよお!!」

何を言っているのか聞こえない。少年の高笑いさえ届かない。癒えた傷口を抉られ、異物を振じ込まれた激痛が煩い。

どうして、どうして僕ばかりがこんな目に合うのだろうか？

嫌うのならばそれでいい。

好かれようなど思っていない。

勝手に嫌い、拒絶しろ。

だからどうかーーーーー僕に触れてくれるな。

苦痛と恥辱を与えてくれるだけなのなら、

僕に触れてくれるな。

僕に触れるのは僕を愛してくれる者だけでいい。



愛無き者が、僕に触れるな。

焼けるような苦痛の中で現れた神楽の渴望<sup>ねがい</sup>、それを願いを叶える願望器であるジュエルシードは聞き届けた。

だが、それは主役を気取る少年の思惑通りではない。

少年が与えたジュエルシード一つと、神楽が砂浜で拾った五つのジュエルシードが、起こしてはならないものを呼び覚ました。

g  
e  
h  
,  
w  
i  
l  
d  
e  
r  
k  
n  
o  
c  
h  
e  
n  
m  
a  
n  
n  
!  
死  
神  
よ  
ど  
う  
か  
速  
く  
へ  
行  
っ  
て  
ほ  
し  
い  
あ  
あ  
わ  
た  
し  
は  
願  
う  
ど  
う  
か  
速  
く  
へ  
!



## 第4話

「アアアアア………」

抉られた左目からダバダバと血を涙のように流しながら神楽は幽鬼の如く立っていた。

「アツハツハ!!暴走したな!?!よっしゃ!!今からオリ主であるこn」

黒塗りの弓を構えた色黒の少年が見下した目で神楽を見る。一目見たときから分らないが酷く強い嫌悪感を感じた。だからジュエルシードに託つけて神楽を殺そうと考えた。

少年は転生者、神々の遊びという訳のわからない名目で殺されて転生することを強要させられたが正義の味方の投影魔術を特典としてもらい、自分こそが主人公だと思い込んでいた。

しかし少年の生はここで終わる。歪んだ笑みを浮かべたまま、頭と胴体が別れた。首が無くなり噴水のように血を吹き出して倒れた少年の遺体のそばに立つのは手を手刀の形に構え振り切った神楽。少年が知覚するよりも早くに近づき、その首を切り落としたのだ。

『マスター!?!おのれ!!よくもマスターを!!』

「F a h r h i n , W a i h a l l s l e n c h t e n d e W e  
l t !」

少年が持っていたアクセサリーが地面に転がり、少年を殺した神楽に怨みの籠った声を向ける。が、神楽にはその声は届かない。だがアクセサリーが何か言っていることには気付いているのか、喋るアクセサリーに足を振り下ろした。

『グギイ!?!』

アクセサリーは僅かに形を歪ませただけで壊れる気配は見えない。  
だから神楽は更に足を振り下ろした。

『ぎゃあ!!や、やめ』

「Leb☒wohl, prangende Gotterprach  
t!

Leb☒wohl, prangende Gotterprac  
ht!

Leb☒wohl, prangende Gotterprac  
ht!

Leb☒wohl, prangende Gotterprac  
ht!」

何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も……  
神楽は耳障りな音を出すアクセサリーに向かって足を振り下ろした。  
五十も振り下ろしたところにはアクセサリーは元の形を無くして公園  
の砂と混ざりあっていた。

「アアアアアアアアアアアアアア………」

その時、不思議な現象が起きた。死んだ少年と砕けたアクセサリー  
から何かが現れ、神楽の左目に吸い込まれていった。見る者がいたと  
したらその吸われた物を魂のようだと思っただろう。その魂は苦痛  
の声を上げながら神楽に喰われた。

「タリ、ナイイ………」

眩くような、それでいて聞くものを凍てつかせるような声が公園に

響く。

そう、足りないのだ。あの程度の塵芥の魂では満たされない。だから………満たされるまで貪ろう。幸いなことに、今食べたのと同じ様な魂はたくさんあるのだから。

地面を蹴り、その細身からは考えられないような跳躍を見せる。そして神楽はそこら辺に転がっている自分を満たしてくれるだろう魂を貪る為に隔離された夜空を駆けていった。

「ジュエルシード!!封印!!」

不定形の存在が少女の持った杖から放たれた桃色の閃光に撃ち抜かれて霧散する。

「ふう………」

少女、高町なのはは下校途中に拾ったフェレットが心配になり、夜に家を抜け出してわざわざ病院にまでやって来たそしてあの不定形の存在と出会い、喋ることの出来るフェレットのユーノから与えられたレイジングハートという魔法の杖でジュエルシードの思念体と呼ばれるあの不定形の存在を封印した。

「お疲れ様」

「大丈夫かい!?」

「怪我は無いか、俺の嫁よ!!」

「よくやったぞ!!」

「ふっ、それでこそ俺の嫁だ」

思念体との戦闘の最中に魔法の才能を持ったものは少ないとユーノは言っていたが………なのは目の前には少なくとも二十人、ユーノがなのはに与えた魔法の力を使えるものたちがいた。しかもそのほとんどが学校のクラスメイトという。

この事実になのは苦笑いするしか無いし、ユーノは地球って恐ろしいところだと間違った認識をしていた。

「はいはい、そこまでよ。なのはだって疲れているのだから………なののは、詳しい話は明日でいい?早く帰らないと土郎さんたち心配するわよ?」

「にやあ!?そうだった!!ごめん!!お休みなさい!!」

自分がこっそり抜け出していたことを思い出してなのは肩に乗せたユーノを連れたまま全速力で駆け出していった。

思念体との戦闘で荒れたこの場に残るのは地球にいる魔法使たち………別名転生者たちだ。

「(さて………この状況はどうしましょうかね?)」

なのはを帰らせた少女、鈴宮愛莉すずみやあいらが二つに別れて言い合いをしている転生者たちを見て思わずため息をつく。

現在転生者たちは三つの派閥に別れている。

一つは救われなかった人たちを救いたいという目的で集まったグループの通称『偽善党』

一つは登場する少女たちと結ばれることを信じて疑わない奴らの総称『踏み台衆』

一つは原作に関わるつもりなど一切なく、平和に過ごしたいと思っている『日和見組』

愛莉はどちらかといえば『日和見組』に分類されるのだがなのは友人、友人が厄介事に巻き込まれているのなら救いたいと思っているので原作にへの介入を選んだ。そして今日は原作が開始される日と言うのもあって愛莉を除いた全員が『偽善党』か『踏み台衆』のどちらかの転生者だった。

「ザ・ワールド!!」

「スター・プラチナ!!」

『偽善党』の転生者と『踏み台衆』の転生者が言い争いから戦闘を始めようとしていた。互いの背後にスタンドを出して一触即発な空気になっていく。愛莉はため息を着きながら仲裁の為に二人の間に割り込もうとする。幸いなことに愛莉の特典は拘束向け、あの二人を止めてさっさと家に帰ろうとしていた。

スタンドを出した二人の顔面が無くなるまでは。

「……………え？」

スタンドが崩壊して力無く崩れ落ちる二人の姿を見て誰かが抜けた声を出した。そうだったのは無理はない。さっきまで生きていたはずの人間が一瞬の内で殺されたのだから。

!! 下手人は崩れ落ちた二人の間に現れた白い影。長い白髪を靡かせ、  
! 左目からはダバダバと血を流しているその姿は幽鬼の如く。

!!!!!!!  
「ア……………アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」  
最速を冠する、殺意が現れた。

先程までの一触即発の空気はどこいったのか、『偽善党』の転生者も『踏み台衆』の転生者も普段することはない共闘という手段をとって現れた最速の殺意と戦っていた……………違う、戦いなどではない。

これは狩りだ。最速の殺意が狩人でその他の者はすべて獲物、狩人を楽しませるだけの存在でしかない。



「レールガンってs」

突き出した手に銀貨を持った少年が手だけを残して挽き肉に変わる。

「お前のたm」

鎌を担いだ少年が首を一回転させて崩れ落ちる。

「衝撃のファースト」

右手に籠手を着けた少年が心臓を貫かれ絶命する。

「出!!k」

黒い刀を持った少年が五臓六腑を引きずり出されて息絶える。

「何なのよこれ……………」

離れた場所からその殺戮を見ていた愛莉は絶望の混じった声色で呟くことしか出来なかった。

前に出てきた三つの派閥の力は拮抗している。それはそうだ、転生者のそれぞれが思い思いの架空の力を願っている、多少の差こそあれど強いことには変わりなかった……………はずだった。

強いと信じて疑わなかった特典が、触れることすら出来ずに蹂躪されている。しかもその相手は見覚えがある、始業式の時に見ているすべての人間に嫌悪感を与えていた少年だった。

彼は始業式以降は不登校で、『偽善党』の転生者たちが友達だとか騒いで彼のことを無理矢理学校に通わせようとしていたなど、愛莉は現実逃避をしてしまった。

そして……………現実が追い付いてくる。

「アアアアアアア……………」

殺戮を終えた神楽が、殺戮を見ていた愛莉に目を向けた。『偽善党』の転生者と『踏み台衆』の転生者たちは不仲だったというのに今は仲良く地面を染め上げる血液と肉片に成り果てている。そして遺体から離れた魂魄が神楽の左目に吸い込まれ、苦痛の声をあげているのを聞いて愛莉はその場に座り込み、失禁した。

与えられる嫌悪感と死の恐怖に顔を鼻水と涙で汚し、無様に失禁する愛莉に殺戮の返り血で汚れた神楽は一步、また一步とゆっくり近づいている。

さっきまでの獲物は抵抗してきたから壊した、しかし抵抗しない獲物ならば……………じっくりと貪ることが出来る。

そうして神楽と愛莉の距離は縮まる。そして神楽が血で汚れた手を愛莉に伸ばした。愛莉には逃げようという気迫は感じられない、この獣に貪られるしかないと諦めていたから。

神楽の手が、愛莉の首元に伸びる。



## 第5話

結界によって現世とは隔絶された世界の中で響くのは発砲音。六回鳴り響き、そして一息よりも短い間で再び六回鳴り響く。

「Fahrhin, Waihall's lenchtende Welt!」

「速いなあおい!!」

その現場で舞うのは白の少年神楽と黒の少年。赤い軌跡を残しながら高速で動き回る白神楽に目掛けて黒の少年が手にしている黒い銃の銃口を向けて引き金を引く。しかし弾丸は神楽に当たることはない。迫り来る弾丸を神楽は嘲笑うかのように加速して避ける。

「End in Wonne, du ewig Geschlecht!」

「当たらねえな………例えで言ったのにマジもんの獣かよ」

「ちよつと!!当たってないわよ!!」

「あ?うつせえぞガキが」

黒の少年は足にすがり付き、ヒステリック気味に騒ぐ愛莉を目を向けること無く蹴り飛ばした。蹴られた愛莉は近くにあったゴミ置き場に頭から突っ込む。

「超加速に回避能力の上昇か………?ならこいつならどうだ?」

黒の少年は冷静に神楽の戦闘能力を見極め、それに適した弾丸を放った。

弾丸の速度は変わらず、神楽の動きを先読みして放たれた弾丸は神



「やったの!？」

「フラグ立ててんじゃねえよ!!」

神楽が倒れたことに気がついた愛莉が被ったゴミを払いながら黒の少年に尋ねたがそれは余計なことだった。黒の少年の注意が愛莉に反れた一瞬の隙を突き、神楽は倒れたままの状態から大きく飛び退き獣のように身を低くした。撃ち抜かれた四肢の傷は塞がっているが神楽は初めて自分に当てた黒の少年のことを警戒しているのだ。

「アアアアアア……………」

「余計なことしやがって……………だけどもあ、対処法は分かった。知覚外からの攻撃、あとは必中技つてところだな……………断罪者装填、ジャッジメント原罪の矢。ついでだ、歌え、グレイヴ・オブ・マリア聖母ノ柩」

黒の少年の手にしていた銃が光輝き、弓のような形になり、少年が矢に当たる部分を引く。そして黒の少年の背後から蝶のような仮面を被った女性の上半身が現れて、人には出すことの出来ないはずの音量で歌った。

「アア!？」

その歌を聞いた神楽は体が硬直するのを感じた。動かす意思はあるというのにまるで体が自分の物では無くなったかと思うほどに動かない。

グレイヴ・オブ・マリア聖母ノ柩と呼ばれる女性の歌は、対象者の肉体に作用する効果がある。例え神楽が暴走した状態にあるとはいえど、彼女の歌が届くのなら逃れられることは出来ない。

カルテ・ガルテ「脳傀儡カルテって言ってな、効くだろう?回避不能な状態から必中の一撃!!避けられるもんなら避けてみやがれ!!!」

カルテ・ガルテ  
脳傀儡によって動けなくなった神楽に向かい、黒の少年は原罪の矢を放った。動けなくなった神楽にこの必中の一撃をかわす手段はない。

そして原罪の矢は神楽を貫く――

「やれやれ、近頃の子供は物騒ですね。そのような物を持っているとは」

――ことは無かった。神楽と原罪の矢の間に現れた男性が腕一本で原罪の矢を受け止めたからだ。

「嘘……………」

「へえ」

原罪の矢を受け止められたことに驚く愛莉と原罪の矢を受け止めた男性を興味深そうに見る黒の少年。間に割ってきた男性は金髪で、人の良さそうな笑みを浮かべ、カソック衣装に身を包んだ神父だった。

「御宅、そいつの関係者？」

「ええ、この子の保護者を務めさせてもらっていますヴァレリア・トリ





を愛して……………

実際には声に出していないが、黒の少年は読唇術で神楽がそう言っているとは分かった。そして神楽はヴァレリアの腕の中で意識を失う。

「さて……………この後の始末はこちらでします。貴方方はどうぞお引き取りください」

「っ!!待ちなさい!!貴方、この現場が見えないの!?!そいつがここで死んでる人みんな殺したのよ!!」

愛莉が地面にある遺体を指差した。それは暴走していた神楽が虐殺した転生者たちの遺体。現場を見れば神楽がやったというのとはわかるはずなのにそれを追求しようもしないヴァレリアを見て叫んだ。

「なら警察にでも行きますか?神楽が彼らのことを素手で殺したと?そんなことを話しても笑われるのが落ちですよ」

確かに彼らを殺したのは神楽である。しかしそれは非常識の範疇の話だ。常識の中で生きている者たちに話したとしても信じられるはずがない。

だというのにギヤアギヤアと騒ぐ愛梨を見かねたのか、黒の少年が愛梨の首筋を思いつきり銃底で殴った。その一撃で愛梨は意識を失い、その場に崩れ落ちる。

「うるせえんだよ。悪いなオッサン、邪魔しちまったな」

「貴方は彼女のように騒がないのですね?」

「オッサンの意見に賛成しただけさ。それにこいつが煩かったのは本当の事だし……………それに、そいつにも事情がありそうだしな。だけど、後日詳しい話を聞かせてもらおうぞ?」

「ええ、当事者の貴方に隠すのは難しいでしょう。教会で、私はそこに  
いますから」

「明日にでも行かせてもらうさ……………俺は綾木信。あやぎしん じゃあ、オツサ  
ン」

綾木信と名乗った黒の少年はそう言ってその場から立ち去った。  
それを見届けたヴァレリアも神楽を抱っこしながら、その場から立ち  
去ろうとする。

「それにしてもオツサンオツサンってそんなに連呼しなくても  
……………私ってそんなに老けてますかねえ？」

地味に綾木信から言われたオツサンという言葉に傷ついている様  
だった。

「戻りました」

「ヴァレリア!! 神楽は?!」

教会に帰り、礼拝堂から入ったヴァレリアだったがそこにはリザが  
待っていた。心配そうな顔をして神楽の安否を尋ねるリザにヴァレ

リアは腕の中で眠っている神楽の姿を見せる。

返り血や目から流した血で汚れている神楽だったが大きな怪我をしていないことに気づいてリザは安堵のため息を漏らした。

「よかった……………」

「安心するのは早計かも知れませんが……………神楽が永劫破壊エイヴィヒカイトを使っています……………それも、シュライバー卿の創造を」

ヴァレリアの言葉を聞いてリザは安堵の表情から絶望の表情に変わる。

「そんな……………!!」

「彼がシュライバー卿の転生体なのか、それともシュライバー卿と同じ渴望を持っているのか定かではありませんが……………神楽がシュライバー卿の創造を使っていたことは事実です」

「まさか……………副首領がこの世界に？」

「いいえ、神楽の使っていた永劫破壊エイヴィヒカイトはどうやら我々の物とは違うようです。恐らく誰かが再現しようとしたのでしよう。そうだとしても、神楽が我々と同じ存在になってしまったことは確かです」

自分たちと同じ存在になってしまったとヴァレリアから言われたリザは寝ている神楽の頬を撫でながら涙を流した。そして、決意に満ちた顔に変わる。

「もう、あの時のように見捨てない。血塗られた道を歩かされることになろうとも、私がこの子を守ってみせる」

「リザならそう言うと思っていましたよ。私も同じ考えです。もう間違えませんか。何を守り、何に立ち向かうのか……………あの時のように間違えたりしません」

夜の礼拝堂で、ヴァレリアとリザは自分たちと同じ存在になってしまった神楽の顔を見ながら誓いを立てた。

ヴァレリアは決して間違えないと。

リザは決して見捨てないと。

彼らが知る者と同じ渴望を抱いた少年に誓った。

## 第6話

F a h r x h i n , W a i h a l l s l e n c h t e n d e W e l t !

Z a r f a l l x i n S t a u b d e i n e s t o l z e B u r g !

夢を見ていた。僕と同じ顔をした者が軍用のバイクに跨がり、人々を轢殺している。

L e b x w o h l , p r a n g e n d e G o t t e r p r a c h t !

E n d x i n W o n n e , d u e w i g G e s c h l e c h t !

その身は爪牙。

黄金の爪牙。

我が忠義は黄金の君に捧げられ、

彼の者を邪魔する輩は許さない。

泣き叫べ劣等。今夜、ここに神はいない。

僕と同じ顔で虐殺をする彼の姿を見て………僕は何も思わなかった。

しかし、あの彼の姿に酷く既知感を覚える。

僕と同じ顔をしているからではない、過去に僕は……あの人に  
あつたことがある？

今世……じゃない。なら前世……いや、あんな血と硝煙の  
臭いが漂つてきそうな人と会つたはずはない……なのに、どうし  
てだろうか……

……  
どうして……彼の姿を見ると、悲しくなるのだろうか  
……

Pater Noster qui in caelis  
sanctificetur nomen tuum.

『……ありがとう■■■■、■■■■しているわ』

どこで出会ったのかを思い出そうとしていると、安らぎを与える歌  
と一緒に女性の声が聞こえてきて、僕の目の前は暗くなった。

「……………あ」

意識が浮上する。窓から入る日の眩しさに目が眩む。ここは……………教会の僕の部屋だ。

「……………お目覚めですか、神楽」

「……………おはよう、神父様」

目を覚ましてすぐ横に神父様がいた。顔はいつものように微笑んでいるものの、纏う雰囲気は沈んだものになっている。

「昨夜、何が起きたのか説明はありますか？」

「……………ううん、要らない。全部覚えてるから」

昨日の夜のことはすべて覚えている。これがどこかの主人公なら御都合主義と言わんばかりに記憶を無くしていそうだが僕にはそんなことは起きなかつたようだ。

「ねえ、神父様……………僕は、どうしちゃったんだろうね……………」

「神楽……………」

「昨日の夜のことは全部覚えてる……………たまたまそこにいたやつらを殺したことも……………でもね、何も思わないんだ……………血の臭いも内臓の触感も断末魔も!!全部覚えているのに……………僕は何も思わない、人を殺したことの嫌悪も罪悪感も忌諱も!!……………何にも感じないんだ……………」

そうだ、僕は昨日のことは覚えている。

あの断末魔の叫び声も、

あの肉や骨を砕く感触も、

あの命を奪うという実感も、

すべて覚えているというのに……………何も感じない。

人を殺したことに嫌悪感も罪悪感も感じず、人を殺すことの忌諱も感じていない。

まるで自分が最初からそんな人間だったと言われているように……………それが怖かった。

「ねえ……………ねえねえねえねえ!!お願い僕のことを嫌わなくて捨てないで!!!なんでも……………なんでもするか……………僕のことを嫌わないで……………!!」

しかし、それよりも僕が人を殺したということによって彼らから嫌われて捨てられることの方が恐ろしかった。誰からも嫌われて拒絶される僕を受け入れてくれる人たち、彼らから嫌われ捨てられることになった……………僕は生きていけない。

その事が、僕にとって何よりも怖かった。

そして涙を流しながら縋る僕のことを……………神父様は抱き締めてくれた。人間と思えない方法で人を殺した僕のことを、まるで壊れ物を扱うかのように優しく抱き締めてくれた。

「捨てませんし嫌いませんよ神楽……………貴方は私たちの家族です。」



何があるとうと……………貴方のことは私が守ります」

「ああ……………ああ……………!!!」

言われた言葉は少なかつたものの、神父様が心の底からそう言っているのは分かった。人を殺したという大罪を犯した僕のことを、彼は守ってくれると言ってくれた。

捨てられなかつた嫌われなかつたという安堵と、神父様の言ってくれた事が嬉しくて、僕は神父様の腕の中で泣くことしか出来なかつた。

「落ち着きましたか？」

「うん……………ごめんなさい」

しばらく泣いてどうにか落ち着くことが出来たので一言謝って神父様から離れる。

「フッフ、このくらいなら何時でも構いませんよ……………神楽、ここからは真面目な話になります。今の貴方のことについてです」

「……………分かってる、早かれ遅かれ話さないといけないことだしね」

昨日の僕はまともじゃなかつた。人の体を素手で引き裂き、弾丸を見て避けれるほどに加速し、撃たれたのに数秒で回復する。どこから

どう見ても異常であることは明らかだ。

「何があったのか、話してくれますか？」

「うん……………昨日は海に行っただ」

そして僕は昨日の夜のことを神父様に話した。

海で蒼い宝石を拾ったこと。

帰り道で崇り神モドキに出会ったこと。

その崇り神モドキを一撃で倒した少年が現れたこと。

そして……………その少年に海で拾った蒼い宝石を潰れた左目にねじ込まれて暴走したこと。

すべてを聞いて神父様は額に青筋を浮かべていた。

「神楽……………その少年はどこにいますか？ちよつと聖槍撃ち込んできます」

「そんなことに聖遺物使うなよ聖職者……………そいつなら僕が暴走して一番始めに殺したよ」

「そうですか……………ツチ」

どうしよう、神父様が今まで見たことのないくらいに怖い。舌打ちするところとか初めて見たんだけど。

「つまり神楽が暴走したのはその蒼い宝石のせいですか……………そう言えば、目はどうなっていますか？」

「そう言えばいつもの癖で閉じてたな……………鏡鏡つと」

ベットの近くにある机の上に置かれていた手鏡を手にして、宝石がねじ込まれたはずの左目を開いた。するとそこには右目とは色の違う蒼い目があった。

「……………目になってる」

「蒼い宝石が目になった……………？こればかりは分かりませんね」

無機物の宝石が有機物になるとかいつからこの世界の物理法則は乱れたのだろうか……………

「後でリザに見てもらおうことにしましょう。彼女は医師免許を持っていますしね」

「そうだね……………ねえ、神父様。宝石のことは分からないけど、昨日の僕のこと、何か知ってるんじゃないの？」

昨日の夜のことを取り乱した僕は落ち着いていた神父様に助けられた訳だが……………神父様は落ち着き過ぎなのだ。あんなものを見れば普通はもっと取り乱してもおかしくないのに、まるで『見慣れていた』かのように冷静だった。だから神父様は何か知っていると聞いて聞いたのだが……………

「……………良いでしょう、お話しします。昨日の神楽のあれですが……………私は似たような物を知っています。永劫破壊、私たちはそう読んでいました。人から多くの信仰を集めた聖異物を用いて使われる魔術で使用者に絶大な力を与えます」

「昨日の……………僕みたいなの？」

「ええ……………しかし神楽のは正確には永劫破壊とは異なると思われれます。永劫破壊エイヴィツヒカイトをエイヴィツヒカイト使えるのは一人だけ、そしてその人物はいない。恐らくその宝石が永劫破壊エイヴィツヒカイトに似たような働きをしているのでしよう。神楽、貴方は少年に宝石をねじ込まれた時に何を願いましたか？」

あの時……………僕は願ったのは……………

「嫌うなら、拒絶するなら、触らないでって、そう思った」

「……………やはりそうでしたか。その願いが、宝石によって形にされたのではないかと私は考えています」

「だと思っ……………それ以外に考えにくいし、あの宝石が原因だと思ってるし」

エイウイツヒカイト  
永劫破壊……………そのせいで僕は暴走した。でもそれがなければ

僕はあいつに殺されていたかもしれないと考えるとどうも憎めない。

「安心してください、貴方だけではありません。私も、リザもエイウイツヒカイト永劫破壊をかけられています」

「そう、なの？」

「ええ……………今考えると実に愚かなことをしてしまったという自覚はありますが」

そう言つて神父様は苦笑していたが……………その目はどこか懐かしんでいるようにも見えた。きつとその時のことを思い出しているのだろう。

「それはともかく、神楽に使われたのが永劫破壊エイウイツヒカイトに似ているのなら私たちが力になれます。ですから、自分は一人だと思わないでくださいね」

「……………ありがとう」

神父様の言葉はありがたいのだが少し恥ずかしくなつて思わずシートで顔を隠しながらそう言つてしまった。

「そうだ神楽、『シユライバー』という人物に心当たりはありませんか？」

「『シユライバー』？誰それ？」

「いえ、知らないのならそれで良いのです」

『シユライバー』……………神父様から言われたのは誰かの名前のようだった。知らないと言えたのは嘘ではない、聞いたことの無い名前だったはずだ……………なのに、どうしてその名前に既知感を覚え、悲しくなっているのだろうか？

「よお、邪魔するぜ？」

『シユライバー』の名前に抱いた既知感の正体を考えているとそんな声と共に部屋の扉が開かれた。

扉の方を見れば戸惑っている様子のシスター。

そして……………

「おっと、元気そうにしてるじゃねえか。俺は綾木信、昨日の夜殺し合った仲だ、覚えてるか？」

黒い服を着て、黒い帽子を被った少年……………昨日、僕と殺し合った少年がそこにいた。

## 第7話

今、この部屋は少し重たい空気が流れている。

その原因は僕の近くに立つ神父様、柔和な笑みは変わらないが警戒しているのか威圧感が凄い。

もう一つの原因は入り口のところで立っている綾木信と名乗った……昨日、僕と殺し合った少年。神父様からの威圧を受けながらもヘラヘラとした笑みを崩そうともしない。

……………お腹痛い……………特に神父様のせいだ。

「なあオツサン、悪いけど席外してもらっても良いか？」

「……………神楽と貴方を、二人にしろと？」

「警戒するのは分かるけどよ、こういうのは当事者だけで話し合った方がいいと思うんだよ。ああ、安心してくれ、別にこいつに何をやる訳じゃないからよ」

「神父様、僕からも頼んで良いかな？」

「……………はあ、分かりました、部屋の外で待たせてもらいます。ですが何かあったら呼んでください、すぐに駆けつけますので」

「うん、ありがとう」

少し不満げだったが僕からの一言が効いたのか、神父様は部屋から出ていった。そして部屋に残っているのは綾木信と僕の二人だけ。

「名前聞いても良いか？」

「……………如月神楽」

「そうか……………なあ如月、お前強いんだな!!」

「……………え？」

嫌われて、罵倒されるのが普通だった。昨日のこともそれだけのこととをされるだけのことをしてしまったという自覚はある。だからそれを甘んじて受けようと思っていたのに……綾木信は純粋な目で、興奮しながら僕のことを見ていた。

「あの高速移動!!あんなの初めて見たぜ!!ただ速いだけならどんな奴にでも当てられる自信はあったのに全部避けられるとか!!なあ、あれ何て言うんだ!？」

「えつと……確か、永劫破壊エイウイツヒカイトつて」

「永劫破壊……くうく!!いい名前だなあ!!それに世界はやっぱり広い!!あんなのが使える奴がいるなんて!!そう言えばあのオッサンもその永劫破壊エイウイツヒカイトとかいうの使えるのか!？」

「ちよ!!ちよつと待つて!!」

余程興奮しているのかベツトの上に乗り出してまで聞いてくる綾木信の顔を手で押す。思っていた反応と全然違う。

「僕にその……報復とかしに来たんじゃ無いの？」

「報復?なんでそんなことにしなくちやいけないんだ?昨日のあれはなかなか楽しめたぜ。退屈してたから感謝はしても恨み辛みを撒き散らすつもりはねえよ」

「嘘だ……今までそんなこと言われたことなんて無いのに……」

感謝なんて、ここにいる人以外からされたことなんて無い。外に出れば拒絶され、罵倒されるだけ、嫌われることしか無かったのに……綾木信は、そんな素振りを見せなかった。

「ああ……そういや学校の連中が白くて気持ち悪い奴がいるとか言ってたっけな?それつてもしかしてお前のことか?」

「……………うん、多分僕のこと」

「ふうん……………どんな奴かと思つて少し楽しみにしてたけど、所詮噂は噂だな。お前のどこが気持ち悪いんだか」

「……………え？」

綾木信の言つた言葉が信じられなかった。みんな誰もが僕のことを見て気持ち悪いと、汚いと言つていた……………それなのに、彼はそれを否定している。思わず顔を見るが……………嘘を言っているようには見えなかった。

「それ……………本気なの？」

「ああ、可愛い顔してると思うぜ？中性的っていうよりも完全そつち側にしか見えない。どこをどうしたらお前のことが気持ち悪い奴になるんだか、理解に苦しむな」

「……………」

誰もいなかった。ここにいるみんな以外が、僕のことを嫌つていた。誰からも拒絶されるだけだと思つていたのに……………まだ、僕のことを嫌わないでくれる人がいてくれた。

そのことが嬉しくて……………気がつけば僕は泣いていた。

「待て!!なんで泣いてんだよ!?!」

「ぐ……………ごめ……………嬉しくて……………つい……………」

「ああもう!!泣き止めよ!!この状況見られたら俺が泣かしたようにしか見えねえじゃねえか!!」

僕だって涙を止めたいが止まらない。いないと思つていた人間がいると分かったから、どうしても泣いてしまう。

「おはよう、神楽」



「神楽君おはよー!!」

その時、僕のことを起こしに来たのか、レアとはやてが部屋に入ってきた。そしてこの状況を見ることになる。

「……………知らない人がいる」

「……………神楽君泣かしとる」

「……………しかもベツトに乗り出して」

「……………つまりこれは」

「嫌がる神楽(君)のことを押し倒そうとしてる!!」

「待て!!待て待て待て待て待ってくれ!!何がどうしたらそうなるんだよ!!」

「喧しいわ!!神楽君のこと押し倒してナニしようとしとるん!?ああん!?!」

「判決、ギルテイ」

「おいしいいい!?その手に持ったキュウリとゴーヤは何だ!?それで俺に何するつもりなんだ!?!」

「ヤられたらやり返す。それが常識。例え未遂だろうが許さない」

「さあ……………神楽君にしようとしたこと、身を持って思いしれ!!」

「違う!!これは冤罪だ!!裁判のやり直しを要求する!!だから……………だからキュウリとゴーヤを持って俺に近づくんじやねえええええええええええ!!!!!!」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

この日、少年の純ケツが失われた……………

「神楽君大丈夫!？」

「お尻痛くない？」

「な、何もされてないから平気だけど……………」

そう言っつて心配そうにしている二人から目をそらす。するとそこには……………尻からキュウリとゴーヤを生やして倒れている綾木信の姿が……………なんというか、悲惨すぎる。

「おお……………おお……………クソツ、初めてが二本刺しとかハードル高過ぎるだろうが。俺はそんな趣味はねえぞ。これで目覚めたらどうしてくれるんだ!? ああん!？」

「喧しいわ!! うちの神楽君の純ケツ奪おうとした罪は重いでえ!!」

「だあかあらあ!! 冤罪だって言っつてんだだろうが!!」

「煩い、次は大根と仙人掌入れるよ」

「ハイ!! すいませんでした!!」

大根と仙人掌見せられてしまうと逆らえないように綾木信はそれは見事なDO☆GE☆ZA☆を披露してくれた……………流石

に可哀想になってきた。

「レア、はやて、僕は何もされてないから平気だよ」

「ほんま？でも神楽君可愛いから気を付けなあかんで？」

「神楽、これあげる。お母さんから貰ったスタンロット。ここ押したら電氣流れるから」

うん……………はやてはいいんだけどレアは物騒な物渡さないでくれる？なんか棒の部分からバチバチと明らかに気絶スタンさせるつもりのない電力の電氣が流れてるんだけど。

「なあレア……………これを刺して電氣流したらどうやろか？」

「採用」

「ヒイツ!!」

「やめたげてよお!!」

レアとはやてがアグレッシブ過ぎる。てかスタンロット刺して電氣流すって……………拷問じゃんか。

「わ、悪い、そろそろ帰るわ……………これ以上ここにいたら何されるかわからないしな」

「ホントにごめん……………」

「次来るときまでには誤解解いてくれよな？でないと大根と仙人掌かスタンロット刺される気がする……………」

「わかっ……………て、次？」

少し綾木信の言っていることが分からなかったから聞き返してしまった。次とはいったい……………

「ああ次だ。俺、お前のこと気に入ったからよ、また来るぜ？じゃあな」

そう言い残して綾木信はレアとはやてに背中を見せないようにしながら逃げるようにして部屋から出ていった。

「また……………来てくれるんだ……………」

前世ではあったが今になってから僕に会いに来てくれる人がいなかったなので綾木信の言葉は素直に嬉しかった……………でも、

「くっ……………!!まだ神楽君の純ケツ狙つとるんか!？」

「衆道だなんて認めない」

先に二人の誤解を解くところから始めようか。

## 第8話

『まさしいいいいいいいいいい！！！！！！』  
「よっしゃ!!決まったあ!!」  
！！！！！！

トンフアーを持った軍服の少年が魔王と呼ばれる軍服の男性を殴っている。このままいけば少年の方が勝つだろう……このままいけばね。

『その程度か？違うだろう!?もつと!!もつと死力を振り絞れ!!そしてこの俺を越えてみせろおとおおお!!』

「よし、コマンド成功」  
！！！！

「ちよ!?そこで廬生覚醒かよ!!」

『リトルボオオオオオオオオオオイツ!!ツアアアアアアリツ!!  
ボンバアアアアアアアアアア!!』

ロオオオオオオオオオオツズ!!ロオオオオオオオオム!!ゴツ  
ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

さあ!!俺にお前たちを………襲させてくれえ!!!  
『ぐわああああああ!!』  
『まさしいいいいいいいいいい!!』  
!!!  
『うわあ………近代兵器三連発から超必殺技………えげつないなあ魔王』

「神楽ウイくん。カンカンカーン」  
「やはり魔王は魔王だったね」

トンフアーを持った軍服の少年が魔王の必殺技の波状攻撃に倒れ、信の敗けが確定する。ネットの噂程度だと思ってたけど………本当に相手との体力差が九割で出来るとか………流石は魔王。

自分の使っていたキャラが敗けたと分かった瞬間に信はorzの

姿勢になる。これは敗けたことがショックだからじゃなくて  
……………そのあとに待ち受ける罰ゲームに絶望しているのだ。

「さあ……………それじゃあ……………」

「罰ゲームを決めるがいい、敗者よ」

「クソツ……………レベルが違いすぎるだろ!!なんであそこから逆転で  
きるんだよ!!廃人か!?ゲーム廃人なのか!」

「そりゃあね、僕とレアとはやてはこのゲームやりこんでるし、休みの  
日なんて二十四時間耐久でやってたからね」

「ガチの廃人じゃねえか!!やりこみ過ぎだろ!!」

「だって……………外に出ても嫌われるだけだから……………」

「あー!!信君が神楽君苛めたー!!」

「おっと、こんなところにトウモロコシが」

「待て!!待って!!待ってください!!トウモロコシなんて突っ込まれた  
ら俺の尻がガバガバ!!に……………!!あ、あ、  
あああああああああああああ!!!  
!!!」

今日も今日とて僕らは元気に過ごしています。

「信、大丈夫?」

「ああ……………まだトウモロコシの粒々の感触が残ってる……………」

「ワハツハ!!うちの逆十字に勝てると思っとなるんか!」

「私のそばもんは無敵」

「クソオ……………あいつら俺の尻を物置か何かと勘違いしてるんじゃないか？」

「それが二人だからねえ」

レアとはやてがスーツの男性と触手を生やした名称しがたい冒険的なキャラを使ってバトってる間にあれからのことでも思い返そうか。

綾木信、彼はあの時に言った通りまた来てくれた。その時にはレアとはやての誤解は解いたんだけどまだ警戒していたらしく、大根と仙人掌を手にして構えてる二人を前にして信はすごい警戒してた……………二人に背後を見せないように。でもそれは最初の内だけで僕に危害を加えるつもりがないと分かったら普通に接してくれた。それでもさっきのトウモロコシのような何かしらの物を用意しているのだけだね。

永劫破壊エイヴィヒカイトについては神父様とシスターが教えてくれた。なんでもざっくりと言ってしまうば渴望を形にするんだとか。それならあの時の『誰にも触れられたくない』という願いに反応して『超高速移動』が出来たのも納得出来る。

そしてあの日の夜のこと……………二人には言っていない、知っているのは神父様とシスターと信と僕の四人だけだ。神父様から明かさないう方がいいと言われたし、僕も二人にあの時のことを明かす勇気が無い。

数少ない僕のことを嫌わなくてくれる人が僕のことを嫌うなんて……………考えただけでもゾツとする。受け入れてくれるなんていう希望的な観測はしていない。殺人という重たい罪を受け入れてくれる訳がないから。幸いなことに信もこの事を口外するつもりは無い

らしいし。

そしてあの日の夜のことは集団殺人事件としてニュースに取り上げられていた。そりゃあ二十人近い子供が死んでいたらニュースにもなる。神父様と信から聞いた話だと一人だけ生き残りがいて警察に保護された……でも精神状態が安定してないとかで病院に入院したらしい。どこからそんなことを仕入れてきてるんだろ？

「だあああああ!!! 敗けたあああああ!!!」

「アゝイムウゝン」

「そばもんつええ………つかあんなキワモノキャラで逆十字に勝てるテレジアすげえ………」

「よしっ、じゃあ次僕ね。それじゃあ………べんぼうで!!」

『あああんめいぞおおお!!ぐるおおおりあああああす!!』

「きた!!吐き気を催すガングロ金髪きた!!これでかつる!!」

「ふっ、私のそばもんに勝てるつもりなの?」

『そつばもおおおん!!』

ガングロ金髪と名称しがたい冒瀆的な触手がぶつかり合う。

うん………なんていうか………こんな日が来るなんて考えもしなかったな………

レアとはやてと一緒に………僕が勝手に思ってるだけかもしれないけど友達の信とゲームして笑ってる………

こんな日が………ずっと続いてくれれば良いのにな………



「……………集まったわね？」

夜、海鳴のどこかにある廃工場。そこに神楽と虐殺の現場に立ち会い、神楽と信との戦いを観た愛莉がいた。薄暗い室内で顔は見え辛いがよく見れば他にも何人が集まっている。

「おいお前、なんで俺たちを呼んだ？それにこの偽善者たちに臆病者たちも一緒に……………」

「偽善者だと？はっ、勘違いしてるキチガイ共にそう言われるとはな」「何い!？」

「……………帰っていいか？」

集められたのは全員が転生者、対立している二組と傍観している一組の計三組の集団に分けられていた。偽善者と勘違いしてるキチガイだと言われた二組は今にも争いだしそうな雰囲気、傍観している一組はそんな二組のやり取りをつまらなそうに見ながら文句を垂れ流している。

「……………『黙りなさい』」

怒気の籠った一声で、対立している二組と傍観している一組は一斉に口を閉ざした。もちろん、これは本人の意思で黙ったのではない。愛莉の与えられた特典の『言霊』、明確な意思を持って愛莉の放った言葉聞いた者はその通りに動いてしまう能力で黙らされたのだ。

「いい？今は下らない争いをしている場合じゃないわ。黙って私の話を聞きなさい、良いわね？」

愛莉のただならぬ雰囲気を感じ取った集団は言霊で黙らされた状態で首を縦に動かして肯定の意を示す。実質、この場で一番優位に立っているのは愛莉だからだ。例えば愛莉が言霊で『死ぬ』と口にしていたら……この場にいる全員はその通りに死ぬだろう。故に、誰も逆らえない。愛莉を黙らせるよりも早く、死ぬことが分かっているのだから。

「今日集まってもらったのは……先日の集団殺人事件のことよ」「あのニュースでやってたやつのことか？あれって原作に関わりたいたい奴らが互いのことを邪魔だと思って殺しあっただけじゃないのか？四年前にもそんなことがあったし」

愛莉の言ったことに傍観していた一人が口を出した。原作に関わりたいたい奴らというのは先程争おうとしていた二組のことである。救われなかった者たちを救いたいと願う派閥と原作に登場する人物と仲良くなりたいたい派閥とでの争いは度々あった。一番大きいのは四年前、その時もニュースに取り上げられるほどの死傷者が出たのだ。それ以降大きな物は無いが小さな小競り合いは続いている。彼は今回もその事だろうと思っていたのだ。

しかし、愛莉はそれを首を横に振って否定した。

「違うわ……あれは、一人の転生者がしたことなの」

廃工場にいる集団がざわめく。特典を持っている転生者たちがたった一人の転生者にやられたと告げられたからだ。その特典はピンから切りまで差はあるがたった一人で二十人近い転生者を殺すな

なんて異常でしかなかった。

「ハピネス」

『はい、マスター』

愛莉がデバイスに告げると、一枚の画像が投影される。そこに写るのは一人の幽鬼、銀に見える白髪と全身を返り血で汚し、左目からダラダラと血の涙を流した中性的な顔をした子供だった。

容姿だけ見れば優れて、少女にも少年にも見えるのだが………誰もがその姿を見て、嫌悪感を露にした。

「こいつが一人で二十人の転生者を殺したわ。特典は恐らく高速移動の類いだと思う。どういう目的でこいつが転生者たちを殺したのか分からないけど………こいつがいたら、間違いなく原作は破綻するわ」

「……………それで、何が言いたいんだ？」

勿体ぶった言い方をした愛莉に痺れを切らした一人が苛立たしげな声で尋ねた。それを聞いて愛莉は画像を消して、廃工場にいる転生者たちを見渡す。そして――

「提案よ、こいつを危険人物と認定して………排除しましょう？」

悪どい笑みを浮かべながら、そんなことを口にした。

## 第9話

「なあ、ここでその宝石とやらを見つけて拾ったのか？」

「うん、ここで五つ見つけて、その返りにジブリの崇り神みたいな奴に襲われてなおかつ弓を使ってる奴に襲われたんだ」

「で、そこで宝石押し込まれたと………つたく、どこの馬鹿だ？意図してジュエルシード暴走させようだなんて」

夜の砂浜、僕は信に宝石のことについて聞かれたから拾った場所に案内した。信から話を聞いたところ、あの宝石はジュエルシードと言う名前で違う形で願いを叶える力があるとか………普通ならあり得ないとかで笑い話になりそうだけど、それを身を持って体験したから笑い話にならない。今もジュエルシードが本物の目になって僕の中で残ってるし。

「五つ………時期を考えると海にあったはずの六つの内の五つか？………原作とは違う流れ………まったく、ホント楽しませてくれるぜ」

「ねえ、あんなのがまだあるなら集めた方がいいんじゃないの？」

「ん？ああ、心配しなくても我先にとって感じて集めてくれる奴らがいるからよ。そいつらに任せておけば大丈夫だ」

「ふうん………レアとはやてとシスターに被害がでなければいいけど」

「おいおい、オッサンのことは良いのかよ？」

「神父様なら大丈夫だと思うよ？前にトラックに下敷きにされたときには無傷で這い出してきてたし」

「え、なにそれ、メツチャ気になるんだけど？」

信が言うにはジュエルシードは21個あって、その内の六つが僕の中に入っているらしい。そして間違った願いを叶え、所有者を暴走さ

せるジュエルシードだけど僕の中にあるのはすべて安定していて暴走する気配が無いんだとか………信とシスターが言ってたから間違っていないと思う。だけどシスターが言うには感情が昂りすぎるとあの日のように暴走する可能性があるらしい。レアとはやてに被害が出ないようにしないと。

「悪かったな、夜遅くに付き合わせて。教会まで送ってやるよ」  
「そう？ならよろしく頼むよ」

信は調べものが終わったのか、送ってくれと言ってきたのでそれに甘えることにした。

「こちら赤龍帝、ターゲットを発見した。隣には『快樂主義』の綾木信の姿もある」

『こちら英雄王、了解した。今集まっているのは？』  
「龍滅魔法、大剣豪、それとスタンド使いと正義の魔法使いが数人ずついる」

『分かった。なら………殺れ』  
「了解」

「なあ……………どうして人気の無いところを選んで帰ってるんだ？大通りの方にいけばもつと人がいるだろ？」

「それはね、人に会わないためだよ。人にあつたら何されるか分からないからね……………」

「あ……………すまんかった」

「いいよ、気にしてないし。気にしてないけど……………レアとはやてがいたら危なかったね、なんかハバネロが無かったとか代わりに七味唐辛子をとか言ってたから」

「刺激物!?今度は刺激物入れられるのか!?マジ勘弁してくれよ……………!!」

レアとはやてが企んでることに恐怖したのか信が尻を押さえながら震えていた。しないようには言ってるんだけど……………なんか信の尻に物を入れるのが二人の最近の楽しみになってるみたいなんだよね。

「まあまあ、二人とも信に会えるの楽しみにしてるんだと思うよ？」

「俺に会うよりも俺の尻に物をぶちこむのが楽しみなんだろうが!?出会いからキュウリとゴーヤ入れられるしなんなのあの二人!?俺がそつちの趣味に目覚めたらどうしてくれるんだ!?神楽が責任取っ手くれるのか!？」

「えっと……………それって、信が僕のお尻に(物を)入れるってこと？」

「……………ごめん、頭冷えた、だから言うならきちんと言ってくれ。その言い方だとガチで誤解されかねない……………!!」

「……………？分かった」

なんか信が真顔で言ってきたので頷いておくが……………何がいけなかったのだろうか？後でみんなに相談してみよう。

「そう言えば……………ツ!?」

僕が話そうとしたときに、空気が変わった。あの日の夜のように閉塞的な感覚、世界が別の色で塗り替えられている。

「これ……………あの日と同じ……………!!」

「結界だ?!? ってことはつまり!!」

何かが来ると警戒している僕と黒い銃を取り出して構えている信を取り囲むようにして、僕たちと同年くらいの少年少女が僕たちを囲むようにして現れる。

『快樂主義』と『凶獣』だな」

『快樂主義』と『凶獣』？僕らのことを言っているのか？だとすれば狙いは僕らで……………理由はあの日のことか？

「お前たちは危険だ……………だから、排除する!!」

それを皮切りに誰もが武器を構えたり、手から炎を出したり、魔法使いの杖のような物を出したり、背後に幽霊のような人型を出したり……………手段は違うが、分かることは一つだけ。

こいつらは僕らのことを、殺そうとしている。

「つ!! 神楽!! 逃げるぞ!!」



「う、うん!!」

現状が良くないと判断したのか信が後ろに向かって駆け出し、それを追うように僕も走り出す。信の足は子供のものとは思えないほどに速い………だけどあの日から僕の体は変わった。自動車のようなスピードで走る信に遅れることなく着いていける。

「鬼!!」

両手と口に刀を持った少年が斬りかかってくる。が、遅い。信の銃弾と比べれば遙かに遅い。

「斬りい!!」

僕も信も、振るわれた刀にかする事無くその少年を通り過ぎる。

次にやって来たのは手から炎を出している少年。

「火龍の咆哮!!」

手から炎を出しているのにしてきたのは口から炎を吐き出したこと。炎の範囲は広いものの、炎その物の速度は遅い。信は左側の塀に、僕は右側の塀に飛び乗って炎を避けて少年を通り過ぎる。

「サギタ・マガカセリエス魔法の射手連弾・ルーキス光の11矢!!!!」

後ろから魔法使いの杖のような物を持った奴らが矢のような弾幕を撃ち出してくる。これは速度も早く、曲がり角で巻こうとしてみるのが僕らの後を追いかけている。

「追尾式か!? 面倒なことをしてくれやがるなあ!!」

信が黒い銃を矢に向かって撃つものの信の銃の弾数は六発、すぐに撃ち尽くして次の弾を装填して撃つがじりじりと距離を詰められている。

「このままじゃ……………!!もつと……………もつと速く逃げないと……………!!」

そうして逃げている内に……………袋小路にへと追い詰められてしまった。矢は信のお陰ですべて撃ち落とせたものの、後ろから足音が聞こえている。

信は強い、それは分かっている。しかし僕がいるせいで信の足を引っ張ってしまっている。信一人ならこいつらなんてすぐに倒せるだろうが僕を守ろうとしているので攻められている。どうか……………どうかして、この場から逃げないと……………!!せめて、信の邪魔にならないようにしないと……………!!

その時、頭の中に夢で見た僕に似た彼が乗っていた軍事用のバイクが浮かぶ。

僕の中で何かが噛み合う音がした。

「形Yelzira h成—————」

そして、意識した訳ではないが……………僕はその言葉を呟いた。

「リンググヴィ ヴァアナルガンド暴嵐纏う破壊獣」

そして、頭の中に描いていた、夢の中の彼が乗っていた軍事用のバイクが現れた。どうしてなどと原因を探している暇はない。

「乗って!!」

信に呼び掛けながらバイクに跨がる。信も躊躇う事無くバイクの後部座席に乗ってくれた。

使い方なんてわかるはずが無かった……………それなのに、体が勝手に動く。ハンドルを回し、まるで獣の雄叫びのようなエンジン音を出しながらバイクは走り出した。

「追い詰めたぞ」

「邪魔だあああああああ!!!」

先程矢を放ってきた一人が飛び出してきたが避ける暇も義理も無

かったので真っ直ぐに突き進む。そいつは一般的なバイクに比べると大きく頑丈なタイヤの下敷きになり、轢き殺された。

握っているハンドルからエンジンの振動以外にそいつの肉や骨を擦り潰して砕く感触が伝わってくるもの………それだけだった。心は轢き殺したことに何も感じない。あの日の夜からおかしくなった僕の精神だったがこの時だけはこれがあった。これにハンドルを緩めたりしたら逃げられないから。

轢き殺した奴を無視してハンドルを思いつきり回す。そうして加速し、また囲まれる前にその場から逃げることに成功した。

「すげえな!!これエイザイヒカイトも永劫破壊なのか!？」

「多分ね!!」

その場から逃げることは成功したものの、相変わらず後ろから追われている。真っ直ぐに走っているが………どうもおかしい、景色が変わらない。まるで同じところを走っているかのように真っ直ぐ進んでも教会にたどり着けない。

「結界だな。大方、空間繋げて無限ループさせてるんだろうよ。この

「ままじやここから出られないな」

「じゃああいつらを倒すしか無いの!?!」

「そうだ……………俺が行くからお前はそのまま逃げてろ」

「え……………?」

信がそう言うのと今まで後ろに感じていた気配が遠ざかる。背後を見れば……………信がいた場所には誰もいなかった。

確かに……………僕が邪魔になってるってのは分かってる。僕がいても足手纏いになることも理解できてる。

このまま逃げてしまいたい。信に任せていれば……………この問題は解決する。

でも……………でも……………

「頭で納得出来ても……………!!心はそうはいかないんだよなあ……………!!」

僕の勝手な思い込みなのかもしれない、でも友達に全部押し付けて自分だけ逃げているだなんてしたくない。

僕も、信と一緒に戦いたい……………でも、僕にあるのはこのバイクだけ。あの夜のようになれば戦えるかもしれないがそうだったら信も一緒に巻き込みかねない。

「力が……………欲しいな……………」

戦える力が、

彼と一緒に戦える力が、

力が、欲しい。

『……………失礼、その方。少々よろしいでしょうか？』

『(……………この主は外れでしたか)』

とあるデバイスは己の運の悪さに嘆いていた。

そのデバイスの主となった者は正義を名乗っているだけの偽善者だった。

確かに、正義であろうとするその心は素晴らしいかもしれない。しかし、いくら正義を語ろうともそれで誰も助けられなければただの道化でしかない。

問題を見かければその問題を解決しようとする……………表面上だけ。勝手に介入して、問題を解決した気になって、去っていく。

そしてその問題は根本的には解決していないのでまた再発する。

善行をしたような気になって酔いしれているだけの者を道化と呼  
ばずしてなんと言う。

始めの頃はこれではいけないとデバイスは考えてその主に進言を  
した……………しかし、返ってくるのはすべて怒声だけだった。

自分は間違っていない、問題はきちんと解決している、知ったよう  
な口を聞くな。

何度も何度も進言をして、何度も何度も怒声で返されている内にデ  
バイスは進言をすることを諦めた。主が言うことにはすべてイエス  
と機械的に答えるだけ。これではわざわざ感情を付けられた意味が  
ない。

『(こんなことなら……………素直な可愛らしい主が欲しかったです)』

そう願えど主は代わることはない。デバイスの主はデバイスの考  
えに気づく事無く、デバイス能古とを相棒だと言っていた……………デ  
バイスはすでに、その主のことを見限っているのに。

そうしてデバイスの主は他の魔導師に呼び出され、転生者を殺す転  
生者の排除に駆り出された。利用されているのは誰が見ても明らか  
なのに、その主は自分にしか出来ないことだと張り切っていた。

『(あ、この子可愛いですね……………彼が私の主ならば良かったのに)』

主の言うことにイエスイエスと機械的に答えながら、デバイスは  
ターゲットである転生者の姿を見てそう考えた。主を含めて集めら

れた転生者たちはターゲットの姿を見て気持ち悪いと罵っていたが、デバイスはそうは思わなかった。

そしてそのターゲットと、隣にいた別の転生者を襲い……………デバイスの主は、ターゲットがどこからか出したバイクに轢き殺された。

『(轢き殺されましたね、ざまあです)』

主が殺されたことを内心喜ぶデバイス。そしてデバイスは幸か不幸か主が轢き殺された衝撃で手から離れ、ターゲットと別の転生者が乗るバイクに引っ掛かった。

ある程度追っ手から離れた彼らだったが、別の転生者はターゲットを守るためかターゲットから離れて追っ手に向かっていった。そして残されたターゲットは逃げることしか出来ない自分を悔いているのか、悔しそうな顔をしていた。

「力が……………欲しいな……………」

無力な自分が腹立たしいのか、今にも泣きそうな顔でそう呟いたターゲットの顔は……………

『(ああ……………可愛らしい……………!!)』

そのデバイスのど真ん中だった。

そしてデバイスは死んでしまった主を忘れ、前の主を殺したターゲット……………如月神楽に声をかけた。

『失礼、そこの方。少々よろしいでしょうか?』



## 第10話

「……………誰？」

『ここです、バイクに引っ掛かっている物です』

何も出来ない自分に歯軋りをしているとボーカロイドのような無機質な女性の声が聞こえてきた。言われた通りにバイクを探してみるとそこには妄想を爆発させたようなデザインのアクセサリーが引っ掛かっていた。

『はじめまして、私は貴方が轢き殺した者のデバイスだった物です』

「轢き殺した……………？ああ、あの魔法使いの杖みたいな持った奴？で、デバイスってなに？」

『転生者であるのにご存じ無いのですか？』

「生憎、神様とやらには出会った記憶は無いもんでね」

『そういうことでしたか……………デバイスというのは、魔導師という魔法使いが魔法の発動を円滑にするための武器だと思ってください』  
「まんま魔法使いの杖だと思っても？」

『認識としてはそれで間違いありません』

「ふーん……………そのデバイスが何の用？御主人様殺した僕を罵倒するつもりなの？」

『いいえ、あの主には見限りを着けておりましたので、寧ろ殺してくれて万々歳でございます』

デバイスと名乗ったそのアクセサリーは元の御主人様についての罵倒を始めた。やれ偽善だとか、やれ自分に酔っているだとか。

「……………愚痴が言いたいならそのまま喋ってれば？」

『すいません、無駄話が過ぎました……………貴方がよろしければですが、私の新しい主になっていただけませんか？』

「……………は？」

間抜けな声を出してしまったが仕方がない。今さつき御主人様を殺されたデバイスが、御主人様を殺した相手に仕えたいと言ってきているのだ。何か裏があるのではないかと警戒しない方がおかしい。

「御主人様殺した僕に主になれ？冗談きついよ。主殺した相手に仕える従者がどこにいる？」

『ここにいます。正直に言えばあんな偽善ぶった奴よりも貴方のような可愛らしい方に使われたかったです』

「うっわ……………欲望全開……………ってちよつと待つて」

『放置プレイですか？いくらでも待ちますとも』

「うん、黙れ」

ネジが十本ぐらい外れたような言葉の前に……………僕のことを可愛いと言った？気持ち悪いではなく？

「ねえ……………僕を見てどう思う？」

『人形のように可愛らしい御方だと思いますよ。デバイスではなく肉体が持てるのならペロペロしてしまいたいぐらいです』

「……………気持ち悪いとか、思わないの？」

『貴方のような可愛らしい御方をどうして気持ち悪いと思えますでしょうか。寧ろ前の主の方が私にとって生理的に合いません』

あの日の夜に出会った奴が話し掛けていた物……………あれがデバイスだとするのなら、デバイスも僕のことを気持ち悪いと口にしていった。それなのにこのデバイスは気持ち悪いと思っていない……………僕を嫌わんでくれる。

「……………君の主になれば、戦う力を得られるの？」

『その質問には肯定で答えさせていただきます。貴方が私の新しい主

になると言うのなら、私は貴方の力となることを誓います』

「なら、主になる。だから僕に力をくれ」

『yes, my master』

デバイスを手取る。アクセサリーの中心にあつた宝石が光り、足下に魔法陣が浮かび上がる。

『記憶、人格プログラムを除いたすべてのプログラムを削除。貴方の名前を教えてください』

「如月神楽」

『マスターネーム如月神楽……………登録完了。新たな私の形と、バリアジャケットの登録をお願いします。思い描いてください、貴方が思う強いものを』

デバイスにそう言われて思い付いたのは—————このバイクに跨がり、黄金の爪牙となって阻むものを轢殺する、白い彼の姿だった。

バイクで轍に変え、二丁の銃を握り、黒い軍服に身を包んだ僕に似た彼の姿を出来る限り鮮明に思い出す。

『……………思考の読み取り完了、反映します』

魔法陣の光が強くなり、思わず目を閉じる。そして光が収まって目を開いた時……………僕の姿は彼と瓜二つになっていた。

黒い軍服に身を包み、両手には大きめの銃が握られている。

『ふう……………良い仕事をしました。シヨタが軍服コスとか私得です』

「お願いだから日本語で話してくれないかな？僕、君の言ってること

の半分も理解できて無いんだけど」

『良いのですか？シヨタ×軍服についての萌を私に語らせれば世界が回帰を要するほどの時間を必要としますが？』

「なら良いや」

とにかく、これで力には手に入れられた。腰に付けられていたホルダーに銃を差し込み、バイクに跨がってエンジンを噴かす。

『そう言えば、あと一つ必要なことを思い出しました』

「まだ何かあるの？」

『名前を、私に新しい名前をください。よろしければ愛称と共に』

名前ね……………確かに名前が無いのは辛いだろう。デバイスというのはこれの総称であって正式な名前ではないのだから。

僕は彼を見たとき、狼のようだと思った。

殺意を撒き散らしながら、白髪を振り乱し、

黄金の爪牙たらんとした彼の姿。

だったら、つける名前はこれが良いだろう。

「ヴァイス・ヴォルフ。愛称はヴィーヴィー」

ヴァイス・ヴォルフ

『白い狼、そしてその頭文字からヴィーヴィー……………登録しました』

ヴィーヴィーの声と共に銃が鈍く光り、銃身にW・Wと狼の刻印が刻まれた。

「ふう……………」

僕は彼と似ている、しかし同じではない。

彼のように人を楽しみながら殺すことは出来ない。ただ、そんな僕だけ、

どうか、貴方の様に振る舞うことを許してほしい。

初めて出来た友達のために、貴方の名前を汚すことを許してほしい。

僕らに悪意をもって触れようと言うのなら、

僕はその悪意を殺意をもって対峙しよう。

今宵この一時、僕は彼のように最速の殺意となろう。

「……………天にまします我らの父よ」

感覚が切り替わる。今までがまるで寝起きで鈍っていたよう。五感すべてが鋭敏になり、研ぎ澄まされた感覚が敵の接近を教えてくれる。

「願わくは、御名の尊まれんことを……………」

そして僕はバイクのアクセルを回した。

敵を轍に変え、友達を救うために。

「……………何のつもりだ？快樂主義者、お前があれを逃がすために殿を勤めるなんて。ついに頭がイカれたか？」

逃げたかと思えば戻ってきた綾木信を前にして、左腕に赤い籠手を着けた少年が見下すように言った。その少年の左右には三本の刀を構えた少年と手から炎を出した少年が控えている。

数だけで見れば一対三の状況の中で、信は余裕を見せつけるかのように黒い銃にゆつくりと弾を籠めていた。

「快樂主義者ねえ、まあそう呼ばれるのは仕方がないか。お前らとは違つて俺は望まらずしてこの二度目を与えられたんだ。何もかもが二度目のつまらない人生……………だったら楽しみを求めて何が悪い？どこかの誰かも言つてただろ？『退屈は魔女をも殺す毒だ』ってな」

弾籠めを終えて、信は銃身を元に戻した。

信は他の転生者たちとは違い、転生を拒もうとした。一度しか与えられないものだから楽しめるというのに二度目など与えられても楽しめない。一度クリアしたゲームで二週目を始めた時にどうしても作業的になってしまうような感覚を、信は二度目の生を与えられた時から感じていた。

「それなのによ……………俺、あいつと遊んでる時楽しかったんだわ。与えられて、デジヤヴを感じる二度目の人生の中で、あいつと遊んでる時は初めて遊んでる時のように楽しかったんだよ……………だったから、それを守ろうとして何が悪い？この下らねえ二度目の人生の中で、初めて出来たダチを助けようとして何が悪い？」

そう言つて信は赤い籠手を着けた少年に向かって銃口を向ける。神楽が信のことを友達だと思つていたように、信もまた神楽のことを

友人だと思っていたのだ。

『マスター、通信が来ています』

「凶獣を追わせた別動隊からか……………冥土の土産に聞かせてやろうか?」

「おう、聞かせてくれや。どうせ逃げられましたっていう報告だろうけどな」

「減らず口を……………デイベイン」

『yes』

赤い籠手を着けた少年のデバイスが、その場にいる全員に聞こえるようにスピーカー機能をオンにして通信を繋いだ。赤い籠手を着けた少年は神楽を捕らえたという報告を期待して、信は神楽に逃げられたという報告を期待して。

しかし……………繋がれた通信は、どちらの期待も裏切るものだった。

『こ、こちらスタンド部隊!!どう言うことだ!?話が違うぞ!?』

「な!?ど、どうした!?」

『あいつの能力は高速移動だけじゃないのか!?クソツ!!クソツ!!クソツ!!』

「落ち着け!!何があつた!?!」

慌てて自分の言いたいことだけを伝えてくる相手をどうにかして落ち着かせようと赤い籠手を着けた少年が話しかけるが相手の興奮は治まるどころかさらに高まる。

『全滅だ!!スタンド使いと!!魔法使いたちが!!俺だけを残して全部!!あいつに殺された!!』

「なっ!?!」





「よお神楽、俺逃げろって言ったよな？なんでここに來てる？」

「……………友達見捨てて逃げられるほど僕は薄情じゃないからね。安心して、デバイスっての拾ったから」

『はじめまして、神楽様の御友人ですね。私は神楽様のペットのヴァイス・ヴォルフともうします。気軽にヴィーヴィーと御呼びください』

「ねえ信、僕ヴィーヴィーの言ってること半分も理解できて無いんだ。だから後で教えてくれない？」

「神楽……………世の中には知らない方が良いことがあるんだ。そして……………やっぱ持つべきはダチだよな!!」

自分の近くにバイクを止めた神楽に、信は嬉しそうな笑みを浮かべながら肩を組んだ。突然のスキンシップに神楽は驚いているものの満更でもない様子だ。

「デバイス……………だと……………!?隠し持ってたのか!?それとも奪ったのか!？」

『神楽様、あれが敵ですか?』

「うん、そうなるね」

狼狽える三人の姿を見て、神楽は夢の中で見た彼のように顔を笑みで歪ませた。それを見て信は少し驚いたが……………神楽同様に笑みで顔を歪ませてそれを消した。

「さて――――――裁きの時間だぜ？」

「泣き叫べば劣等。今夜、ここに神はいない!!」

快樂主義者と凶獣が、敵に牙を向ける。

## 第11話

「さて——————裁きの時間だぜ？」

「泣き叫べ劣等。今夜、ここに神はいない!!」

信がコンクリートを蹴り、神楽がバイクのエンジンを吹かして駆け出す。赤い籠手を着けた少年はいまだに現状を理解できていないのか動かなかつたが、そばにいた三本の刀を持った少年と手から炎を出した少年が二人に遅れて動いた。

「火龍の鉤爪!!!」

神楽に向かったのは手から炎を出した少年。バイクに乗る神楽に向けて炎を纏った手を突き出す。

「ソオイッ!!」

それを見て神楽はバイクの前輪部分を持ち上げて炎を纏った手にぶつけた。そしてバイクの前輪と炎を纏った手がぶつかり——————炎を纏った手が弾けた。

説明など必要ないかもしれないが一応説明させて貰おう……………炎を纏った手よりも、神楽が乗るバイクの方が強かった、それだけのことである。

「もう、一丁!!」

神楽の攻撃はこれだけでは止まらない。持ち上げた前輪を落とし、今度は後輪を持ち上げてその場で半回転する。元の重量に遠心力が加わったバイクの後輪が手が弾けたことで啞然としている少年の顔

面にぶつかり、パアンと小気味の良い音をたててトマトのように弾け飛んだ。

「ありゃ？泣き叫ぶ暇もなく逝っちゃったの？期待外れだなあ〜流石は劣等、自分の力も弁えずに向かつてくるとか!!」

頭を無くしたことで崩れ落ちた少年の遺体を目の前にして神楽は笑う。今宵一時、夢の中で現れるあの黄金の爪牙を名乗る少年になると決めたのだ。であるならば、どれ程酷い死を与えようとも彼のように高笑いをしなければならぬ。

殺したという事実に対する嫌悪感も罪悪感も無いまま、神楽は夢の中で現れる彼のように自分が轍に変えた死骸の前で笑っていた。

「二刀流居合い!!」

刀を持った少年が信に向かい合い、抜き出していた刀を三本ともしまいその内の一本を構えた。

「獅s」

「アホかお前」

そして信は弾丸を刀を持った少年の眉間に見舞う。何時撃ったのか知覚できない程の早撃ちだった。

「敵の前で獲物納めるとかマジないわ〜いや、居合い自体をデイスってる訳じゃないのよ？そういう技法が昔からあって、それが今にも伝わってると思ったら素直にリスペクトしてるよ？でもよ……………命の取り合いしてる中でやんなよ。しかも飛び道具持ってる奴の前でやるとか、マジ頭イカれてるよ、お前。それとこれだけ言わせてくれや。銃は剣より強し……………ん〜名言だねえ〜」

銃口から出る煙に息を吹き掛けながら信は眉間に穴を開けて倒れている死体を見下しながらそう告げた。

神楽と信によって連れてきた二人を瞬殺されたことで赤い籠手を着けた少年の意識がようやく戻ってくる。

「なんで………なんでだよ!! 転生者一人殺すだけの簡単な仕事じゃないのかよ!?!」

少年は自分こそが主人公だと思い込んでいるタイプの転生者だ。なのはの周りに煩い転生者たちが飛び回っていると思っていたが所詮は踏み台だと見下して彼らのことを侮っていた。そんなときに仲間の一人から原作を壊そうとしている転生者の存在を聞かされ、『お前にしか出来ないことだ』と言われ、主人公たるこの自分に任せろと意気揚々と戦いに向かった。心配してなのか他にも転生者たちを連れていかされたが、どうせ自分を映えるための演出装置にしかならないと内心では見下していた。

その結果、連れてきた転生者たちは全滅。自分も窮地に立たされている。

念話で話を持ち掛けてきた奴に文句を言いたかったがそんなことをすれば殺されることは目に見えて分かっている。

だからこの転生者は、戦うことを選んだ。

「バランス・ブレイク 禁手化!!!」

『Welsh Dragon Balance Breaker  
!!!』



「……………は？」

捕らえたと思った拳は空を切る。そこには神楽の姿は愚か神楽が乗っていたはずのバイクの影すらなかった。

「遅いよ」

「グギッ!?」

呆気にとられていた少年の背後から衝撃が襲う。体制を崩されながらも何とか背後を確認するとそこにはバイクの前輪を持ち上げている神楽の姿があつた。

「おいおい、俺のことを忘れてくれるなよ?」

「グアッ!?」

少年の意識が神楽に向いた一瞬の隙に信が銃の引き金を引く。響いた音は一度だけ、しかし放たれた弾丸は六発。何れもが関節などの鎧の脆い部分に当てられる。

「なめ、るなあ!!!」

神楽には当てられないと判断したのか、少年は信に狙いを定めて突貫する。固く握り締めた拳を力任せに大振りに振るうだけのパンチ。武術の経験など欠片も感じられない喧嘩もしたことのないような初心者の方つパンチ。

確かに信には神楽のような脅威的な速さは無い……………だが、思い出して欲しい。

信は、かつてジュエルシールドを埋め込まれて暴走し転生者たち相手

に虐殺していた神楽相手に、無傷で戦っていたと言うことを。

「クハッ、おせえよ」

「なっ!？」

少年の拳が空を切る。しかも信は余裕を持った回避ではなく、鼻先で擦れるようなギリギリの回避で避けたのだ。驚きに一瞬動きが止まるもののすぐに正気に戻りもう一度拳を振るう。しかしそれすらも信は先程と同じ様に擦れる程度のギリギリの回避で避けてみせた。

信は断罪者ジャッジメントという武器と聖母グレイプ・オブ・マリアノ枢という特別な遺体を持つているものの、その身体能力自体は常識的な範疇で優れている程度で目を見張る程に飛び抜けている訳ではない。なら、何故暴走した神楽相手に無傷で戦い、倍加された少年の攻撃を余裕を持って回避出来ているのか？

それは一言で言ってしまうば……………勘である。信は暴走した神楽の攻撃も、少年の拳も正確に目で追えている訳ではない。ただ直感で『多分こんな風に攻撃をしてくるのだらうな』と感じ取り、それに従って避けているだけなのだ。

言葉にしてしまえばそれだけのことと笑われるかもしれないがそれだけのことで傷を負っていないのは事実、鎧から機械的な声上がり少年はさらに倍加されていくがそれでも信に決定的なダメージを与えることは叶わない。それどころか人を小馬鹿にするような笑みを浮かべながらわざと擦らせるような回避を続けている。

「ブンブンブン振り回すだけとか、扇風機か何かか？どうせやるなら今じゃなくて夏場にやって欲しいね」

「クソツ!!なんでだ!!なんで当たらない!？」

「ああそうそう、一つ忠告だ……………周り見てないと、痛い目見るぞ



？」

「何!?グアツ!?」

背後から白銀の鎖が伸びて少年の首を締め上げる。真っ正面から向かってきた物ならばいざ知らず、背後からという不意打ちに近いそれを回避する手段を少年は持っていなかった。

「凄いね、これも魔法ってヤツなの？」

『ハイ神楽様。こちらはチェーンバインドと言う主に拘束用に用いられる魔法です。それではこのままあれを西部劇のワンシーンや世紀末の使者のように引きずり回してやりましょう』

「モチロン!!」

ヴイーヴイーの銃口から伸びた鎖に繋がれた少年の姿を一別して神楽はバイクのアクセルを回す。獣の唸り声のような低い音を立てながらバイクは少年を引きずりながら発進した。少年はなんとかチェーンバインドから逃れようともがく、しかし力任せに引き千切ろうとしてもチェーンバインドは碎けない。それはそうだ、ジュエルシードという規格外な物体を数個取り込んだ神楽の魔法が高々数度の倍加をした程度の少年の力で千切れる訳がない。チェーンバインドが千切れないと理解した少年が引きずられている体制から建て直そうとする、がそれすらも神楽が絶妙なタイミングでバイクの加速減速や進路の変更をするために叶わなかった。

「よ、いっしょっとお!!!」

十分な速度に至ることが出来たのか、神楽はバイクの前輪を持ち上げて叩き付け、そこを軸にして強引に車体その物を百八十度回転させた。それによって引きずられていた少年は遠心力によって引っ張られて上空に投げられる。いつの間にかヴイーヴイーの銃口から伸びていたはずのチェーンバインドは外れており、少年の全身に絡み付い

ていた。

「後は任せるよ、信」

「オツケイ神楽、俺に任せな」

神楽の言葉に返事を返しながら信は銃から弓のような形に成形された光を手にして鎌を少年に向けていた。自由な時であるならばともかく、チェーンバインドに縛られて動くことの出来ない少年にこれから逃れられる手段はない。

「念には念を、だ。『原罪の矢』、レベル3までいってやるよ」

「や、辞めろ!!お前たち、俺が誰なのか分かってるのか!?主人公だぞ!!俺を殺したらこの先の物語全部破綻してしまうぞ!!分かってるのか!?!」

信の弓矢が脅威であることに気づいたのか少年はチェーンバインドから逃れようともがきながら惨めな命乞いを始めた。

「あ?知らねえよ。命乞いなら他所でやりな」

「主人公?何それ?死にたくないと今さら言うとか。だったら戦場こに来るんじや無いよ」

しかしとすべきか、やはりとすべきか、命乞いをしている少年に信と神楽から返ってきたのは冷たく無慈悲な物だった。そも、二人が戦っている理由は『向こうから手を出してきたから』という受身的な理由だった。

そうなら、特別な事情でも無い限りは手を出してきた下手人を逃すわけが無い。

「っー訳だ、逃げ」

「じゃあね、どこからの誰かさん。お願いだからヴァルハラになんて  
辿り着かないでよ?」

「辞めろおおおおおおおおおおおおおおお  
!!!!!!!」

少年の悲痛な叫びを掻き消すように原罪の矢は放たれ、この周囲を  
覆っている結界に穴を空けながら少年を塵一つ残さずに消滅させた。

「報告です、赤龍帝とその他の転生者たち全員がやられました」

「うん……………見ていたから分かってるよ」

黒髪の少年が向かってきた転生者たちを皆殺しにしてハイタッチ  
をしている神楽と信の姿を映している映像を見ながらそう返した。  
人を殺して喜んでいる二人の姿を見て何か思うことがあるのか、黒髪  
の少年の手は固く握り締められ、そこからは血が流れていた。

「……………二十人の転生者がやられましたでしたがこれで奴等の力を測ることが出来ました。どうかご理解を」

「分かっている、これも正義を成すために必要な犠牲なんだ……………彼らもきつとわかつてくれるはずだ……………だけど……………!!僕はお前たちを許さない!!人を殺して喜んでいるお前たちを!!絶対に許さない!!」

黒髪の少年はそういいながら死体の転がる現場から逃げている神楽と信の姿を憎しみの籠った目で睨んでいた。

「……………やはりあの程度では駄目だったか」

結界の上空から、神楽と信の姿を見下ろしている金髪の少年がいた。二十人の転生者を殺した二人の姿を、その少年は憎悪ではなく興味深そうに見ている。

「にしてもあやつら、悪くはない力を持っている……………これならば、あやつらに塵掃除を任せるのも一興よなあ……………」

二十人の転生者を殺した二人に対してそう評価した金髪の少年は、何かを企んでいるような笑みを浮かべながらその場から姿を消した。

## 第12話

「んあ……」

ふと感じたさむさから眼が覚める。思わず二の腕の辺りを摩りながら体を起こして辺りを見回すと今いる場所はリビング、周りには神父様とシスター、レアにはやて、そして信が寝転がっていた。確か昨日は……そうだ、今日が休みのひだからってゲーム大会しようとかレアとはやてが言い出したんだっけ？付けっ放しになっているテレビを見るとゲームのキャラクターである魔王とよばれるキャラが立っていて、エイコーだかハルミツだか呼ばれているキャラが死んでいた。

「時間は……5時半か」

時計を見ればまだ早朝の時間帯だったが不思議と眠気は無く、気分的にも二度寝したいとは思わなかった。

「そういえば朝の景色ってどんな感じなんだろう？」

頭の中に湧いて出てきた素朴な疑問、寝起きということでも深く考えること無く、雑魚寝で硬くなった体をほぐしながら玄関に向かった。

「うーん!!夜も良いけど朝の空気も悪く無いね」

薄っすらと靄のかかる朝の雰囲気を味わいながら体を伸ばして感想を口にする。朝特有なのかひんやりとした空気が心地よく寝惚けた頭を起こしてくれる。

今は5月。5月といえば大型連休があつたりする月なのだが誰彼構わずに嫌悪をばら撒いてしまう僕という存在のせいで基本的に家に籠ってゲームをすることになっている。いつもなら5人なのだが、今年はその信が入って6人であった。

あの夜の転生者たちの襲撃から時間が経っているが、それ以降あいつらは接触しようとする気配を見せてこない。僕はこれで終わってくれば良いなど希望的観測を望んでいるが神父様と信は何か大きな行動をする前触れなのでは無いかと警戒している。

「はあ……どうしてこうなっちゃったのかな……」

厄介事しか運んで来ないジュエルシードの入っている左目を眼帯の上から撫でる。まあ信という友達が出来たりもしたので悪いことばかりでは無いかもしれないが悪いことしか起こってないのでどうしてもそちらに眼がいつてしまう。幸いなことに厄介事は僕たちの手で何とか出来る程度なのだが……もし、戦うことが出来ないレアやはやてに行ってしまうとなると……

「……………!!」

ゾツとする、背骨の代わりに氷柱が差し込まれたような寒気が走る。それは起こり得る可能性の一つ。無力な2人が転生者やジュエ

ルシードに抗う術など持たない。そんな未来を想像してしまうだけで言いようの無い不安に襲われる。嫌われていた僕のことを優しく包み込んで受け入れ入れてくれた2人、そんな2人が居なくなるという起きて欲しく無い起こり得る可能性の一つ。

「……もし、もしも……そんなことが起きてしまうようなら……」

僕はきつと壊れてしまうだろう。レアとはやてがいたからこそ今の僕があるのだ。そんな2人が居なくなってしまう僕が僕であるとは思えない。

「だとしたら……」

僕がするべきことは一つだけだ。

2人を、守る。

僕を受け入れ愛してくれる2人を穢し、壊そうとする存在を一片の容赦も見せずに轢き殺す。

僕の陽だまりを、日常を奪う者を塵殺する。

それが永劫破壊エイヴィヒカイトを使うことが出来、それしか使うことが出来ない僕がするべきこと。

「……ううっ!!寒くなってきた」

5月とはいえどまだ早朝は寒い。家に戻り、ココアでも作って飲もうと考え、踵を返した。

そして不意に感じるざわつき、それは過去に何度も体験したことのある危険が迫っていることを報せる警報。それに従って迷うこと無く転がるようにしてその場から離れる。すると転がっている最中、体一つ分どうにか移動出来たあたりのところで上から何かが僕のいた場所に落ちてきた。地面が砕けて小規模ながらもクレーターが出来ているところを見ると相手は僕のことを殺すつもりだったらしい。

「ちっ!!外したか!!」

襲撃者は頭と腰から明らかに人の物ではない犬の耳と尻尾を生やしている女性。痛々しい人だと思ったが作り物では無いらしく時折本物のように動いている。

次に感じたのは閉じ込められた時のような閉塞感、どうやら結界を展開されたようだった。

「ヴィーヴィー」

『了解です』

タグと呼ばれるプレート付きのネックレスになっていたヴィーヴィーを起動させてあの日の夜の様な軍服姿に代わりに、手に銃を持つ。そして目の前にいる女性に銃口を向けるのでは無く、銃を頭上に持って来て交差させた。

「クッ……!!」



やって来たのは頭上からの一撃、交差した銃と振り下ろされた鎌がぶつかり合って火花が飛び散る。鎌を持つのは奇襲が失敗に終わって悔しそうに顔を歪めている金髪の少女。膠着しても旨みが無いと分かっているのか金髪少女は弾かれるようにあっさりとは僕から離れて犬耳の女性の隣に立った。2人分の気配を感じたことから何か繋がりがあると予測していたけどどうやらこの2人は仲間らしい。

「こんな朝早くから何の用かな？」

手にしている銃が歪んでいないか確認しながら無警戒のようなフリをして話しかける。心の内では2人のことを警戒してるが信や神父様がいる教会の近くで襲撃してきた、つまりはどちらかが結果が張られたことに気がつくはず。一対二でも負けるつもりは無いがここは万全を期す為に時間を稼ぎ、助けが来るのを待った方が良いと判断した。

「……貴方が持つジュエルシードを渡して下さい」

少女が口にしたのはやはりと言うべきかジュエルシードの名前だった。どうやら彼女たちは前に襲ってきた転生者たちのように僕と信への復讐ではなくジュエルシードが目当てのようだ。

「まあたジュエルシード……こんな危ない物を集めて何がしたいのさ？」

「……貴方にそれを教える理由はありません」

「フェイト!!こんな気持ち悪い奴早くとつちめてジュエルシードを奪ってやろうよ!!」

犬耳の女性は僕に向ける嫌悪感を隠そうともしないでフェイトと呼んだ少女に悪びれた様子も見せずにそう提案した。どうやら彼女も僕に嫌悪を抱く類の人物らしい。それに関してはなんら思うこと

は無い。ずっと言われ続けていたことだからもう慣れた。信や  
ヴィーヴィーが特別であっただけで、僕からすればこれが当たり前で  
普通の事なのだ。

「渡してくれませんか？」

女性からの声には反応しないでフェイトは淡々の機械的に尋ねた  
だけだ。ジュエルシードは僕の身体の中に入って今は僕の左目にな  
っている。それを渡そうとすれば僕は左目を抉り出さなければな  
らない。自分から自分をいたぶる様な趣味は持っていないので正直  
に渡したくないと言うしかないな。

「嫌だよ？なんで見ず知らずの君たちに渡さなくちやいけないのさ」

「……そうですか。だったら」

『photon smasher』

鎌からマシンボイスが聞こえ、黄色い球弾が真っ直ぐに  
教会に目掛けて飛んでいった。

「っ!？」

それを見て全力でその場から駆け出す。こううんにも球弾はさほ  
ど速度に乗っていなかったので追いつく事が出来、それを蹴り飛ばし  
て別の方向に飛ばす。反射的に動いてしまったせいか触れてしまい  
吐き気を催してしまうがそんなことはどうでも良い。今重要なのは  
こいつが教会を狙ったということだ。

「……ねえ、今のはどういふつもりなのかな？」

結界が張られているから直接的な被害は出ないと思うが物が物によ  
つては結界を張っていたとしても被害が出ることがあると言つて

いた。もし今張られているのが後者だったら教会はさっきの球弾で壊されていた。

「貴方がジュエルシールドを渡さないのならその建物を破壊します」

などと、フェイトはそれがさも当然であるかの様に告げた。

ジュエルシールドを渡さなければ教会を壊す？

あんな宝石の為だけに僕の陽だまりを壊そうとするのか？

何様のつもりだ。

何の権利があつて僕から温もりを、

僕を愛してくれる人たちの居場所を奪おうとするのか？

ああ、こいつは敵だ。あの自分から手を出して来ておいて噛み付かれたことに被害者面をして騒ぎ立てている転生者たちと同じだ。

ならば殺さなければならぬ。

最速の殺意の皮を被るまでもない。

こいつは、こいつらは僕自身の殺意で殺さなければならぬ。

その時、僕の中から何かか噛み合う様な音が聞こえた。

フェイトは母から命じられて使い魔であるアルフとともにジュエルシードを集めていた。途中で高町なのはという地球の魔導師と戦闘になることになったが今のところは順調と言っても差し支えない様なペースで集められている。

そんな中、街の中にある教会から複数個のジュエルシードの反応が見つかった。それは神楽の中にあるジュエルシードの反応で、本来ならば信の張った結界やリザの施した封印によって感知されないはずなのだがゲーム大会の疲れからか隙が出来てそこをフェイトに悟られたのだ。

いきなり6つも反応が見つかったことに驚きながらもフェイトはアルフとともにジュエルシードの確保に向かう。するとそこにいたのは真っ白な髪をした少女の見える少年。朝靄と相まって幻想的にも見えるのだが少年から発せられる正体不明の嫌悪感が全てを台無しにしていた。

ジュエルシードの反応は少年から、それが判明するとフェイトとアルフは互いの顔を見て頷き、嫌悪感から来る吐き気を堪えながら強襲を仕掛けた。

強襲は失敗、さらに少年は魔導師だったらしくデバイスを取り出して戦い慣れている様な立ち振る舞いを見せてる。結界を張ったとはいえど時間をかけていれば再び高町なのはが現れるかもしれない。

だからフェイトは強引な手段を選んだ。少年の住居と思わしき建物に向かつての魔力スフィアを用いた攻撃である。魔力スフィアは

一つ、見せつけるためにわざと速度を落とす物だったが少年は過剰な反応を見せて魔力スフィアを弾いた。フェイトはこれだと思い、少年にジュエルシードを渡さなければ教会を攻撃すると告げた。

それが、少年の――――神楽の逆鱗に触れるとも知らずに。

「……お前も、なのか？」

「えっ？」

フェイトの要求に対して神楽は応じるのでも断るのでもなく疑問で返した。予想していない反応にフェイトは抜けた声で返してしまふ。

「お前も……僕から奪おうとするのか？」

神楽は顔を俯かせているので表情は分からない。手には銃が握られているがそれもだらりと下げられていてフェイトたちには向けられていない。

「暴力には慣れてる、それが普通だったから。

罵倒には慣れている、それが当たり前だったから。

僕を嫌おうとするならば好きにするといひさ、そんなものはすでに慣れている。

だが……僕から陽だまりを、彼らといられるこの場所を奪おうというのなら話は別だ」

神楽の顔が挙げられる。フェイトは神楽の顔を直視してしまった。

怒りと悲しみの入り混じった、狂気の顔を。

「全員、慈悲も無く轢殺する」

Fahr, hin, Walhalla's leuchte Welt  
Zarfal, in Staub deine stolze Burg

神楽の口から聖句が紡がれる。

嫌悪する者からの拒絶と愛してくれる者への接触を望む渴望。

Leb, wohl, prange die Götterpracht  
End, in Wonne, du ewig Geschlecht

嫌悪する者などどうでも良い。しかし、愛してくれる者に危害を加えようとするならば、その全てを轢殺して轍に変えてみせることを誓う。

創造—————

Niflheimr Fenriswolf  
死世界・凶獣変生

そしてここに、神楽は皮を被って演じたのでは無く、真の『最速の殺意』に成った。

## 第13話

聖句を唱え終えた瞬間、フェイトとアルフは神楽の雰囲気が一変したことに気づいた。先ほどまでのこちらを小馬鹿にしていたような空気は無くなり、2人に強い敵意と殺意を向けている

『フェ、フェイト!! 一体何があつたんだい!?!』

『わ、分からないよ!! いきなり纏っている空気が変わった!?!』

神楽の雰囲気が変わったことによる動揺を顔には出さぬが念話ではその動揺を隠しきれていなかった。

2人は知らなかった。フェイトが脅して教会を傷つけようとしたことが、神楽にとつての逆鱗であることを。

自らを受け入れてくれる人間たちが住まう空間を壊そうとしたフェイトの行動が神楽の怒りを買ったことを。

唐突に雰囲気が変わった神楽にフェイトとアルフが動揺している中で神楽の心中は—————意外かもしれないが落ち着いていた。

(周りがよく見える……前に暴走した時は何がなんだか分からなくなる程に激昂していたのに)

正確には激昂していたのでは無く周囲にあるもの全てを憎悪していたのだ。ただそこにあるだけで憎い、空気でさえ纏わりつく感覚がどうしようも無く気持ち悪かった。しかし今の神楽は落ち着いていた。前回の暴走の時には周囲に手当たり次第にばら撒いていた憎悪と殺意を冷静に、彼が愛する者たちの住まう教会を傷つけようとした2人に向けている。

神楽が僅かに前傾姿勢になる。それを見たフェイトとアルフは動く直感的に察知して構える。

そして――――神楽の姿を見失った。

「えっ……?」

目を離していないのに神楽の姿を見失ったことでフェイトが抜けた声をあげる。

「フェイト!!」

アルフの慌てたような声と同時に銃声が響き渡る。フェイトが反射的に後ろを振り返ればそこには障壁を張ってフェイトを庇っているアルフと銃口をこちらに向けている神楽がいた。

「アルフ!」

「このくらい、平気さ!!」

心配そうに声をあげたフェイトにそう返したが防ぎきれなかったのかアルフの肩からは血が流れ逆の手で撃たれた傷口を押さえていた。傷は深くは無さそうだがこれでは戦うことは難しいだろう。

(ちよっと待って……傷?)

アルフの傷を見てフェイトは疑問に思った。神楽の銃は間違いなくデバイスである。デバイスには魔法によって相手が傷付かない様にする非殺傷設定を行う事ができる。衝撃による気絶こそは避けられないがそれがあるから加減をする事無く全力で攻撃する事ができるのだ。フェイト自身もそうだし、前に戦った高町なのも魔法は非



殺傷設定をして使っていた。

だというのに神楽は非殺傷設定を行う事無く、こちらをこちらを殺しにかかって来ている。

それを理解してしまった瞬間、フェイトは言いよの無い寒気に襲われた。

フェイトは母親によって用意された家庭教師役が認める程の戦闘技能を持っているがそれはデバイスによる非殺傷設定を前提としたもの。対して神楽は戦闘技能自体はそう優れたものでは無い。自らの意思で戦ったのはヴィーヴィーを手にした夜の一度だけ、今回の戦闘で二度目だ。神楽自身には射撃の経験など無く、撃つ際にはヴィーヴィーによる補助が欠かせ無い。それでも、神楽には殺人さつりくの経験がある。自分たちに襲いかかってきた転生者たちを情け容赦無く物言わぬ死体に変えた事がある。

殺し合いの経験があるか、否か。例え客観的に見てどれ程フェイトが優れた戦闘技能を持っていたところで殺しをした事が無い時点で殺し合いの場では三流以下。逆に神楽は技能こそ欠片も持っていないが殺し合いを経験し、生き残っているという事実は一流と言える。

相手を殺してでも生きるという覚悟の有無が、フェイトを鈍らせる。

例え相手が殺し合いをした事の無い三流以下であろうとも神楽にとっては関係の無い事だった。

フェイトとアルフがどのような目的があつてジュエルシードを集めているのかは知らない。知るつもりも無い。ただ、目の前で生きていフェイトとアルフる肉塊2つが彼を受け入れ愛してくれる者たちが住まう空間を傷つ

けようとした。その事実を持って、殺戮しようとする。

神楽の姿が再び消える。それに気がついたフェイトがとった行動は高速機動による戦闘。神楽の移動が転移では無く高速移動によるものだ。察しをつけて自分の土俵である高速機動で戦う事を選んだ。

魔力による身体能力の強化のレベルを上げて神楽の姿を捉える事に成功する。確かに神楽の移動は速いがそれでも追いつけ無い速度では無かった。ソニックムーブによる高速移動で駆ける神楽に追いつき、自身のデバイスであるバルディッシュを振りかぶる。タイミングは完璧、振り抜いたバルディッシュの斬撃は神楽にぶつかる事は避けられ無いと思われた。

しかし、ここにいるのは真なる『最速の殺意』に成った神楽である。

間違いなく当たると思われた一撃は――――なんの手応えも無く空を斬り裂いた。

「っ!？」

間違いなく当たると思われた一撃が当たらなかったことでフェイトは思わず声をあげそうになったが神楽の銃撃による衝撃を受けて苦痛な声をあげた。攻撃を察知してくれたのかバルディッシュが判断して展開した障壁によって銃撃は防げたがフェイトの心中にあるのは混乱だった。

(そんな!? さっきのは間違いなく当たったはずなのに!?)

神楽が余裕を隠していたのかと思いついてフェイトはさらに速度を引き上げる。自身の持てる最高速度、家庭教師役でも見失う程の速度で神楽を攪乱しようと動き回る。第三者がそれを見ていたなら誰もが

フェイトの姿を見ることは出来なかつただろう。後に残っている黄色い軌跡だけがフェイトがいることを証明する。

だが「ーーーーー」神楽はアツサリと、嘲笑うかのように最高速度で動くフェイトを上回る速度で動いて見せた。

(この子…私よりも速い!?)

自信のあつた高速機動すらもアツサリと上回る神楽にフェイトは心が折れかける。

神楽は確かに速いがそれだけでは無い。

Niflheimr Fenriswolf エイヴィヒカイト  
死世界・凶獣変生、永劫破壊において創造と位置付けられている位階に定められているその能力は相手を上回る速度で動けること。『他者との接触を拒む』という渴望が元になって生まれた異能。例えば相手が光の速さで移動しようとも、神楽がそれを知覚している限り神楽は光の速さを上回る速度で動ける。

つまりは「ーーーーー」フェイトが高速で移動すればするほどに神楽は速くなる。

そのことを知っているのは現在その力を振るっている神楽だけ、神楽の力のことを知らないフェイトはただ焦ることしかできない。

『フェイト!!』

「っ!!」

唐突にアルフから念話が届くがフェイトは瞬時にその意図を察する。持てる力を全て振り絞つての神楽への特攻、そしてバルディッシュを全力で振るう。当然のごとくその一撃は躲され、神楽はフェイ



鎖に首を絞められて苦しそうに呻く声が心地良い。

鎖から伝わる手応えが心地良い。

そして何より「……」大切な陽だまりを、自分を愛してくれる者たちのいる空間を奪おうとした奴らが無力に蹂躪されている姿を見るのが気持ち良かった。

だが神楽には甚振って楽しむ様な趣味は無い。確かに蹂躪される2人の姿を見るのは心地良かったがあくまでもそれは途中経過でしか無い。2人をハンマー投げの様に振り回して投げ飛ばす。投げ飛ばされた2人は教会の敷地内から飛び出して道路に出る。

暖かな空間を汚さぬ様、教会の外で殺すためだ。

蹂躪されて抵抗する力を無くした2人に神楽は近づく。顔に浮かべているのは満面の笑みだがその眼には陽だまりを壊そうとした2人に対する憎悪が見える。

「死ね」

そして倒れている2人の頭に銃口を押し当てて引き金を引く。

『動くな』

「なっ!？」

しかし引き金は引けなかった。どこからか聞こえた声に従うかの様に身体が自由が奪われた。いくら神楽が引き金を引こうとしても1mmも動かない。それどころか神楽の周囲に砂が集まってきた。始めは砂埃かと思うほどだったが次第に量を増していき、神楽の身体に纏わりつき「~~~~~」

「砂縛柩」

グシャリと何が潰れる様な音が砂の中から聞こえた。一度だけでは無く二、三度グシャリグシャリと砂の中から音が聞こえ、砂が退けられた場所には全身の骨を砕かれた神楽がいた。意識は無いもの。まだ生きているのは永劫破壊エイウエイヒカイトの加護のおかげか。それでも神楽は動けなくなつたという事実には変わりない。

「大丈夫かしら？」

何が起きたのか分からずに混乱しているフェイトとアルフにバリアジャケットに身を包んだ少女が近づいた。

「あな、たは……」

「おい、役目が終わったなら俺は帰るぞ」

助けてくれたことには感謝しながらも素性の知れない少女に警戒しながら尋ねるが、上から現れた巨大な瓢箪を背負った少年に少女の注意が行ってしまう。

「助かったわ」

「ふん……にしてもこいつも不幸だな。こんな奴らに眼をつけられることになるとはな」

「何、文句でも言いたいのかしら？」

「別に無い、俺はお前から依頼を申し込まれて受けたただけだ。報酬を忘れるなよ」

そう言つて瓢箪を背負つた少年はフェイトとアルフに眼もくれずにその場から立ち去つていった。少年の態度が気に入らないのか少女は苛立たしげな顔付きになるがフェイトとアルフがいることを思い出して直ぐに笑顔を作つた。

「ごめんなさいね、あいつは気難しい奴だから」

「私の名前は鈴宮愛莉すずみやあいり、こいつのことに付いて詳しく話したいわ。誰かジュエルシードに詳しい人について知らないかしら？」

## 第14話

「……リザ、信、神楽は見つかりましたか？」

「いいえ、見つからないわ」

「こっちもだ」

夜の帳が下りて暗くなった教会の中で蠟燭の灯りだけを頼りに話している者たちがいた。ヴァレリア、リザ、信の三人である。彼らが探しているのは言うまでもないと思うが神楽だ。連休中に突然姿を消した彼のことを三人は必死になって探している。

「魔法使って探しているが痕跡があつたのはこの教会の敷地内だけ。他にも無いかと町中駆け回ったけど見つからない……こりやあもしかすると別次元に連れて行かれたかもしれない」

唐突に姿を消した神楽の消息は掴めていない。いくら探しても見つからないことから信は神楽は地球にはいないのでは無いかと考えた。普通ならばそれは妄想だと切り捨てられるだろうがこの世界ではあり得ない話では無い。彼らがいる地球、それとは別に魔法という文化が栄えている別次元がある世界なのだ。いくら探しても見つからないならば地球ではない世界に連れて行かれたかもしれない。魔法に関わっている信はそう考えた。

「あり得ない、そう切り捨てられれば良かったのですが」

「あり得ない話じゃないからな。神楽は俺と同類連中を殺している、それが連中の琴線に触れて拐われたつてのはあり得無くない。もしそうなってるならこっちはお手上げだ。なにせ別次元は山ほどある、そんなから神楽の居場所を探すだなんてボートで海図もコンパスも無しに地図にも載ってないような小島を見つけろって言われているようなもんだ」



「だったら……!!だったら!!このままあの子を見殺しにしろって言うの!?!」

信の物言いにリザが怒りの声をあげる。リザは血の繋がりの無い神樂のことを我が子同然にも思っている。テレジアという実子とはやてという神樂と同じ孤児ががいるが向ける愛情に優劣は無い。

あの子を守ると決めた。

あの子を救いたいと願った。

その想いに偽りは無い。

故に神樂のことを見捨てることも捉えられるようなことを言った信に怒りを向けた。

「はあ?神樂を見殺しにする?……冗談キツイぜ、シスター」

それに信は同じように怒りで返した。確かに自分の言い方が悪かったかもしれ無い、神樂のことを見捨てると言ったように思われるかもしれない。リザの気持ちを理解しているつもりだが神樂のことを見捨てるのかと言われて信は黙っていられなかった。

「あいつは俺のダチだ。困ってるなら助けてやるし捕まってるなら助けてやる。見捨てるなんてしてやるかよ」

信にとって神樂は友人であると同時に恩人であるとも言える。望まない生を押し付けられて白黒にしか見えなかった世界に色を着けてくれた友人、そんな神樂を見捨てるなど信は欠片も考えていなかった。

例え手足がもげようとも、

例え万を超える敵が立ちはだかろうとも、

神楽のことを助けると、信は本気で思っている。

互いの気持ちを理解しているつもりだったが神楽が見つからなかったことの苛立ちからリザと信の間に不穏な空気が漂う。どちらの間違っていないと分かっているから何も言わなかったヴァレリアがパアンと柏手を叩いてその空気を霧散させる。

「リザ、信、落ち着きなさい。二人の気持ちはよくわかります。ですが今は言い争っている時ではありません」

「……そうね、ごめんなさい」

「いや、こつちも言い過ぎた」

「さて……もしも神楽が信の言った通りに別次元に連れて行かれたと仮定してですが、それを追いかける方法がありますか?」

ヴァレリアは信に尋ねる。町中を探し回ったというのに神楽の痕跡は見つからなかったということは信の言ったことに現実味が帯びてくる。つまり神楽はこの世界では無い別の世界に連れて行かれたと。だからヴァレリアはそう仮定して話を進めることにした。

「……俺には難しいな。俺の能力はあくまで戦闘に特化したものだ。それ以外となると出来なくは無いがどうしても劣っちまう」

「そう、ですか……」

信の言葉にヴァレリアは分かりやすく落ち込んで見せた。いつものヴァレリアならば笑顔を崩すことなく対応出来たかもしれないが神楽のことが精神的にきているからなのか感情が表に出る様になっていた。

「そう落ち込むなよオッサン」

そんなヴァレリアに向かって信は励ます様にそういった。その顔にはヴァレリアと違い落ち込んでいる様な気配は見られない。

「確かに俺には無理だと言ったさ。だから、俺以外のそういう事が出来る奴を使えばいい」

そう言った直後に教会の扉を叩く音が聞こえた。リザはヴァレリアの顔を見て、ヴァレリアは許可を出す様に頷きを返す。そしてリザが教会の扉を開くとそこには二人の少年がいた。

一人は桃色の髪をして巨大な瓢箪を背負った少年。一番目を引くのは瓢箪だろうが少年の目元には年不相応な隈がクッキリと出来ていた。

一人は茶髪を逆立ててピンクのサングラスをかけた少年。

「来たな、『我愛羅』に『クーガー』」

『我愛羅』と呼ぶのは辞めろと言ったはずだ。俺には阿武斗という名前がある」

「俺の事も『クーガー』じゃなくて箒と呼んでほしいねえ。ま、格好は意識してやってるけどよ」

阿武斗と箒と名乗った少年たちだが信は謝るところか二人の事を無視してヴァレリアとリザに二人の事を説明し始めた。

「こいつらは今言った別次元の世界の一つで何でも屋をやっている連中だ。職業柄追跡とかもお手の物だろうからこいつらを呼んだわけだ」

「なるほど……」

「本当に大丈夫かしら？」

信の説明から二人なら神楽の居場所を突き止められるそうなのがヴァレリアとリザの反応は良いものではなかった。それはそうだろう。突然神楽と同じ年くらいの子供が現れて探すと言われても不安でしかない。

「まあやるだけやってみようぜ？あ、これが探して欲しい奴の写真な」

二人の反応に苦笑しながら信は一枚の写真を阿武斗と箒に差し出す。そこに写っているのは連休中に撮った写真。はやてが車椅子から飛び降りて前から、テレジアが後ろからのしかかるように神楽に抱き着き、それを見て微笑んでいるヴァレリアとリザ、カメラのタイマーをセットして戻っている途中に石に躓いて中に浮かびながらもカメラに向かってダブルピースをしている信。この教会にいる全員が持っているそれを二人に渡して抱き着かれている神楽を指差した。

「どれどれ……へえ、可愛い娘じゃないか」

箒がヒューっと口笛を吹きながら神楽のことを褒めているが……それは神楽のことを女だと思っっているからである。確かに神楽は初見では少女と間違っても仕方のない容姿をしている。信は箒の勘違いに気づいたが……面白そうなので黙っておくことにした。

そんな中で……阿武斗の反応が目についた。何を言うでもなくじつと写真に写る神楽の顔を見ている。元々が無表情で分かりにくいところがあるがその様子に信は阿武斗は何か知っているのではないかと予想した。

「おい阿武斗、どうかしたのか？」

「こいつのことは知っている……この間依頼でこいつの捕獲を手伝わされた」

阿武斗の一言で教会内の空気が変わる。信は阿武斗の額に銃を突き付け、ヴァレリアとリザも先程までの表情を消して仇を見るような目で阿武斗を睨んでいる。さらに教会の目立たないところにあった施錠されていて入れないようになっていた扉の施錠が外れ、そこから得体のしれない気配が漂っている。

「デメエ……知っていることを詳しく聞かせろ」

「地球にいる同類から依頼があった。暴走した転生者がいるからその捕獲を手伝って欲しいとな。依頼人については守秘義務があるから言えないが……そいつはこいつを連れてフェイト・テストロッサと共に転移していった。恐らくは時の庭園に連れて行かれたのだろう」

誰が依頼してきたのかは告げずに阿武斗は神楽の行方を答えた。阿武斗と篝は何でも屋で生計を立てており、『命に勝るものは無し』『金払いの良い客には絶対服従』というスタンスで経営している。だからヘタなことを言えば殺されると理解していたから素直に答えることにした。

「時の庭園？……そうか、神楽にはジュエルシードが宿ってたな、それが目的か」

神楽のことを怨んでいた転生者がどうしてフェイト・テストロッサと転移していったか疑問に思ったが答えは直ぐに出た。神楽の中にはジュエルシードがあり、フェイト・テストロッサはプレシア・テストロッサの命令でジュエルシードを探している。つまり神楽ごとジュエルシードをプレシア・テストロッサに渡すつもりなのだろう。故に殺害ではなく捕獲。不幸中の幸いと言うべきか、今の所は神楽に命の危険は無いことを知ることができた。

「阿武斗、篝、今回の件は見逃してやる。それに金も払ってやる」

神楽の居場所を知ることには出来たがそこにいる敵勢力は未知数。原作ならば警備用の機械人形がいる程度だったがおそらく転生者の介入が考えられる。

「だから手伝え、時の庭園から神楽を助け出すのを」

だから信は神楽を拐った要因の一つである阿武斗とイマイチ状況が飲み込めていない籌にそう持ちかけた。

## 第15話

「……」

薄暗い部屋の中で椅子に深く腰掛けている紫髪の女性がいた。彼女の名前はプレシア・テストロッサ、彼女はとある目的の為にジュエルシードを運んでいた輸送艦を襲撃し地球にジュエルシードをばら撒いた。その目的とは彼女の実子であるアリシア・テストロッサの蘇生。正確にはアリシアを蘇生する為の手段を得る為におとぎ話のような存在であるアルハザードに行こうとしていた。

次元の狭間にあると言われているアルハザードには正規の手段では行くことは出来ない。そこでプレシアはジュエルシードに目を付けた。所有者の願いを歪んだ形で叶える願望機としてでは無く、ジュエルシードに込められている魔力そのものに。一個で世界が崩壊する恐れがある程の次元震を起こすそれを二十一個全て集め、その魔力で次元の狭間にあるアルハザードに向かう。それがプレシアの計画だった。

しかしプレシアの表情は良いものではない。その顔には苛立ちを表しているかのように歪んでいる。それはプレシアの計画に問題が生じてきたからだ。

一つは時空管理局の存在。地球で言う所の警察と裁判所が混じったような権力を持っている管理局がジュエルシードの存在に気がつき、回収する為に動き出したのだ。プレシアがやっていることは間違い無く犯罪行為、捕まればアルハザードに向かうことが出来なくなってしまう。

一つはフェイト・テストロッサの存在。テストロッサの姓が与えら

れているがフェイトはプレシアの娘では無い……アリシアの細胞を元にして作られた人造魔導師、それがフェイトの正体。アリシアの代わりになればと思い作ったのだがアリシアとフェイトは類似点を探すのに苦勞する程に似ていなかった。だからジュエルシードの回収の命を与えて動かしていたのだが魔法文明が無い世界だとは思えないような高レベルの魔導師たちが現れたことで結果はよろしく無い。稀にフェイトの助けになろうとしている魔導師もいるのだがプレシアはフェイトにそれらを囮にして逃げるように指示、フェイトも困惑したような表情になりながらも指示に従って逃げていた。

そして……プレシアの背後、視界に入らないように十字架に磔にされて拘束されている一人の少年の存在。その少年は如月神楽、どうしてなのか分からないが姿を見るだけで、声を聞くだけで、それだけでどうしようも無い嫌悪と気持ち悪さを掻き立てる存在。そしてプレシアたちが使っている魔法とは全く違う手段を用いて戦っていた。その方法には研究者としての性が働いてしまうことがあったがアリシアの蘇生を思い出すことで踏み止まった。彼にはどうしてなのかは不明だがジュエルシードを六つも体の中に宿していた。神楽自身からジュエルシードの反応があったことを不思議に思ったプレシアがサーチャーで調べて発覚したことだ。神楽の使う手段は魔力を封じることで無力化することが出来た。そしてプレシアは……ジュエルシードの反応が集まっていた神楽の左目に、指を突っ込んで眼球を抉りだした。

麻酔も無しに行われた凶行に神楽は泣き叫ぶ。神楽の叫びに嫌悪と気持ち悪さを感じながらもプレシアはジュエルシードを手に入れられた喜びに震えていた。そして眼球があるはずの血塗れの手を開くと……そこには何も無かった。まさかと思いい血の涙を流しながら閉じられている神楽の目をこじ開ければそこには抉りだしたはずの眼球があった。



そこから先は拷問にも等しい時間だった。何度眼球を抉りだそうとも消えて無くなり、何事も無かったかのようには神楽の中にある。何度も何度も、プレシアが数えていた限りでは二十は繰り返したが結果は変わること無かった。数えるのが億劫になる程に眼球を抉りだされたためか、神楽は項垂れて動く気配が見られ無い。息はしているのか胸元が微かに動いているので生きているだろう、しかし精神が死にかけていた。むしろよく壊れなかったと褒めてやりたい。齡十歳に満た無い子供でありながら大人でも発狂しかねない拷問染みたことをされたのだから。

そうしてプレシアは神楽からジュエルシードを取り出すことを諦めて神楽をそのままジュエルシードとして扱うことに決めた。幸いにも必要なのはジュエルシードそのものではなく魔力のみ、それを引き出し行使する手段をプレシアは持っていた。

「……やっぱり使えないわね」

そのプレシアが見ているのは空中に投影されている厚みの無いモニター。そこには地球出身の白い魔導師の砲撃に飲み込まれるフェイトの姿があった。

何を考えているのか白い魔導師がフェイトを助けようと近づいているのを見てプレシアは魔法を行使する。すると白い魔導師がフェイトを抱き抱えて海面から飛び出して来た瞬間に紫の雷が落ちる。それと同時に二人の持つデバイスにハッキング、収納されているジュエルシードを全て回収、プレシアの前には待ち望んでいたジュエルシード十五個が宙に浮いていた。

「これで、これでようやくアルハザードへと旅立つことが出来る……!!」

フエイトと管理局が集めた十五個と神楽の中にある六個、全二十一個のジュエルシードが揃ったことにプレシアは歓喜した。

「なあプレシアさん、ちよつと良いか？」

早速ジュエルシードを使いアルハザードへと向かおうとしたプレシアに声をかける少年がいた。その見た目は幼く、神楽と同じ年頃に見える。そしてそれは一人ではない。この場には三十人程その少年と同じ年頃の少年少女がいた。彼らは神楽を連れてきた鈴宮愛莉が連れてきた地球出身の魔導師たち。何かあった時のための戦力だと言つて彼らを置いていったのだ。愛莉は何やら用があるとか言つていてこの場には見えないのだがプレシアからすれば迷惑な行いでしか無かつた。それでも彼らをこの場に置いているのは義理立てと計画の邪魔をさせない為の機嫌取り。経験こそ足りないが才能だけではエース級でそれぞれ固有のレアスキルを持つ戦力を容易く揃えられる愛莉の機嫌を損ねれば計画の邪魔をされると思つたからの行動だつた。

「……何かしら？」

「いやね、ジュエルシードの魔力を抜き出したらそいつどうなるかわからないじゃん？ だったら一つだけどうしてもやりたいことがあつてよ」

そう言つてその少年はデバイスに収納してあつただろう鉄パイプを取り出して意識の無い神楽の腹目掛けて加減無しのスイングをぶつけた。無防備なところに、それも魔力でコーティングされて強度も上がつてる一撃を受けて神楽は意識を取り戻したが内臓を痛めたのか吐血する。

「ガハッ!? ゲホッ!! ゲホッ!!」

「おう起きたか真つ白野郎。起きがけに良いもん見してやろうと思つ

てな」

苦しむ神楽の姿が嬉しいのか少年はニタニタと不愉快になる笑みを浮かべながら神楽の前にモニターを投影した。

そこに映されていたのは海鳴の街にある一軒の教会――神楽と神楽を愛する者たちが住んでいる場所だった。

教会がある場所から数km離れた海鳴の都市部のビルの屋上に一人の少女の姿があった。彼女こそが鈴宮愛莉。一人の転生者が戯れにジュエルシードを使った為に暴走した神楽の凶行に巻き込まれた唯一の生き残り。そんな彼女はまるで親の仇でも見るような目で遠く離れた教会を睨みつけていた。

愛莉の頭の中にあるのは神楽に復讐することだけ。それは他の転生者が殺されたからという理由ではなく……神楽に屈辱を味わわされたからというものだった。

神楽を見たものは僅かな例外を除いて嫌悪と気持ち悪さを感じさせる。そして無意識のうちに神楽のことを下に見るようになる。つまり自分よりも下の存在であるはずの神楽に恐怖してしまった屈辱を晴らす為に彼女は動いている。今している行動もその一環だった。

空を見れば雲の少ない晴天、そうだというのに教会の上空にはどんなよりとした雲が集まっている。それを見ている人がいるのなら異常

気象か？と警戒するのだがそうでは無い。これは愛莉が他の転生者に言霊を使つて命令したものだ。初めはその転生者はそこまでする必要があるので乗り気では無かったが言霊を使った説得を行うことで愛莉の頼みを快く承諾するという一種の催眠術をかけた。

そしてその転生者が与えられた力を振るう。

突如、教会に目掛けて雷が落ちた。一度だけなら自然現象と言えたかもしれないがそれが二度、三度と続けば不自然になる。さらに続けて竜巻が起こり、そして大粒の雹が雨のように降り注ぐ。

雷が砕き、竜巻が切り裂き、雹が押し潰す。そうして数分後には……教会があつた場所には、瓦礫の山が出来ていた。

「あ……ああ……!!ああああああああああ  
!!!!!!!」

教会が瓦礫の山に変えられる瞬間をリアルタイムで見せつけられて神楽は叫ぶことしか出来なかった。神聖さを感じさせていた教会は見るも無惨な瓦礫になっている。そんな光景を見せつけられて神楽が黙っているはずが無い。エイウイヒカイト永劫破壊を使うことが出来なくなり、年相応の力しか出せないというのに拘束を外そうともがいている。

頭のどこかではそれが無駄なことだとは理解している。でも、それは理性で抑えられるものではなかった。嫌われ拒絶される自分のこ





「許さない……」

あの日常せつなを奪ったお前たちを、

「許さない……」

あの日常せつなを壊したお前たちを、

「許さない……!!」

あの日常せつなを汚したお前たちを、

「絶対に許してなるものかあああああああ  
!!!!!!!」

狂気じみた憤怒と純粹な渴望ねがいに呼応するようにプレシアの手元に  
あつたジュエルシードが輝いた。

ジュエルシードは何故歪んだ願いを叶える願望器として知られて  
いるのか考えたことはあるか？それはジュエルシードを使ったもの  
たちが正しい方法でジュエルシードを使っていなかったからである。

ジュエルシードとは二十一個で一つの存在である。一個一個でも  
次元震が起こるほどの魔力を有しているが願いを叶える為には一個

だけでは足りない。その結果不完全に願いを叶えてしまい、歪んだ形で叶えることになってしまうのだ。

そして叶えられる願いもなんでもいいという訳ではない。強く、強く、それこそ飢えていると言っても過言ではないほどに願わないと叶えられない。過去にはそれほどまでに強く望んだものがいなかったのだ。

しかしここには二十一個のジュエルシードと、大切な日常せつなが続いて欲しいと願っていた神楽がいる。

そうしてジュエルシードは正しい方法で使用される。

ジュエルシードは神楽の願いを叶えるために、世界に穴を開けてでもその方法を求めた。

「……ヒュー☒こいつは中々」

ここでは無い世界……いや、恐らくは世界のどこにも属さないであろう空間にそれはいた。

「まさか無間と似たような渴望を抱くなんてよ」

それは何が楽しいのか、自分が見つけた少年の渴望を感じて笑っていた。それには酷く共感を覚える。多少の差異はあれど、自分も彼と同じようなことを願っているのだから。



「拒絶なんてしねえよ、むしろ大手を振って歓迎してやる。その願いを間違ってるだなんて思わねえからな」

そしてそれは賛辞を送る。

「……そうか、お前も俺と同じようなことを望んだんだな」

そこは世界を管理する空間。ごく少数の存在しかしらず、また立ち入ることも許されていないそこには中性的な顔付きをしてマフラーを巻いた少年がいた。

「まったく馬鹿な奴だよ、そんな馬鹿げたことを望むだなんて」

自分と同じような渴望を抱いた存在に少年は嬉しそうな、それでいて悲しそうな笑みを浮かべる。

「だけど一つだけ言えることがある。その願いは間違いなんかじゃない。同じような渴望を持つ俺だからこそ、その馬鹿げた渴望を認めてやるよ」

そして少年は祝詞を送る。

喜んで学べ  
Discellibens

Die Sonne toent nach alter Weise In  
 Brudersphatoret Wettengesang.  
 Und ihr voregeschriebe  
 Reise vollendet sie mit Donnergang.

詠いあげられるのは日常を愛おしいと願った者の詠。何気無い今  
 を永遠に味わいたいと望んだ。

Und schwel und begreiflich schnell  
 In ewigen schneel und begreiflich schnell  
 Dampflammet einelmbelitzender schlag  
 Dem Pfad einelmbelitzender schlag

未知などいらぬ、変化など不要。変わらぬ今こそあればいいと心  
 の底から望み願った。

Dankeliner diche horgruende mag,  
 Und alle deinen hohen werken

詠うのは日常せつなを奪われた者。理不尽によつて大切な陽だまりを奪  
われた者。

Sind herlich 我ガ wie 渴望 am ソ ersten ガ Tag 原初 ノ 庄 廠

だからこそ、この詠は彼に相応しい。日常せつなを奪った愚か者に裁きの  
ギロチンを落とすために。

創造 Briah | | | |

涅槃Eine寂静Faust・終曲Finale  
!!!!!!

## 第16話

「AAAAAAAAAAAAー！！！！」

第二の渴望を見出し、様変わりをした神楽が吠える。目も覚める様な白だった髪は燃える様な紅と赤銅色に変わり、背中からは禍々しい刃が翼の様に広げられている。

ーなんだこれは？

この神楽の姿を見たプレシアは驚愕する。事前にフェイトと愛莉から聞かされていた情報と全く違う姿になっているのだから。

愛莉は理性を無くし、高速の移動を行う獣を思わせる様な戦い方をしていたと言っていた。フェイトは理性を保ちながら自身を上回る高速移動をしてきたと言っていた。二人から得られた情報ではここまで明確な変化をもたらすとは欠片もなかった。愛莉からの情報はともかくフェイトからの物が嘘とは考え難い。アレはプレシアの言う事なら全て従うのだから嘘をついたとしても彼女にはなんのメリットも無いのだから。

情報には無い姿にはなったが高速移動による戦闘は変わらないはずだと考えてプレシアは神楽に仕掛けていた保険の魔法を発動させる。その魔法は重力、対象にかかる重力を数百倍にまで引き上げて拘束するという術式。使用された者は例外無く潰れてしまうために管理局から違法とされている魔法の一つだがプレシアには関係無かった。

だが、魔法を発動させたというのに神楽には変化が見られない。普通ならばまともに立っていらなくなるはずなのに神楽は平然と

立つたまま。

甘いと言えない。神楽に与えられた魔の法は永劫破壊、エイウイヒカイトかけられた者を魔人へと墮とす副産物として様々な恩恵を与えられる。身体能力の向上、防御能力の向上、擬似的な不老不死……そして靈的装甲。これらを貫き神楽にダメージを与える為には同種の力、つまり永劫破壊エイウイヒカイトをかけられた者の力が必要不可欠。通常の兵器でもその気になればダメージを与える事は出来なくも無い、しかし靈的装甲を貫いてダメージを与える為には一撃で数千人を虐殺出来るようなレベルの兵器でなければダメージを見込めない。プレシアの魔法では神楽の靈的装甲を抜いて影響を与える事が出来なかったのだ。

それに気づかないながらも神楽の変貌のショックから立ち直った転生者たちが動き出す。ここに来て神楽が脅威となったことを悟ったからだ。対応が遅すぎると言われるかもしれないがそれを言うのは酷というものだろう。

投影によって編み出された古今東西の魔劍聖劍が射出される。

人々の願いが形となった神造兵器が振り下ろされる。

黒い靈圧が斬撃として放たれる。

九つの尾を持った狐が黒球を吐き出す。

陽炎の様に揺らめく荒武者が黒く燃える手裏劍を投げる。

二振りの双剣から16連撃が繰り出される。

空気を圧縮して作られたプラズマが猛る。

千の雷が落ちる。

目の前を覆い尽くす程の砲撃が発射される。

なるほど、常人であるのならこれらの攻撃を受けただけでチリも残さずに蒸発するだろう。エイウイヒカイト永劫破壊の使い手だとしてもダメージを受けるかもしれない程の攻撃の嵐。



廢墟となつた教会の真上に当たる空中に一人の少年がいた。建物を一つ破壊し、そこに住まう人々を殺したというのに少年の顔からは表情が抜け落ちていた。

彼はあの夜、愛莉から神楽の姿を見せられた時に他の者と同様に言いようの無い嫌悪感を感じていた。しかし、それと同じ位に彼に同情の念も抱いていた。誰からも理由無く嫌われる神楽の事を彼は憐れんだのだ。それは普通の感性だと言えるが神楽の原因不明の嫌悪を知る者からすれば異常な感性とも言えた。

転生者たちが神楽の討伐を決めている中で彼だけは反対をした。理由も無くそんなことをするとは考え難い、まずはその理由を探るのが先決だと言い放つた。それは正義感に燃える者や、神楽を倒して自分こそがこの世界の主人公だということを証明したい者からすれば裏切りや水を差されたに等しい発言だった。殺気立つ転生者たちを愛莉が言霊をチラつかせながら脅すことでその場を納めたが、その瞬間から彼は愛莉に目を付けられた。

集会の翌日、彼の家に愛莉がやって来た。そして――愛莉の特典である言霊が使われた。ここまで強引な手段に出るとは思わなかった彼は言霊に逆らえずに愛莉に洗脳される。しかしそれは普通の洗脳とは違っていた。彼の精神はまだ囚われていない、彼の身体だけが囚われている。これは自分の思う様に動かなかつたことに対する愛莉の報復だった。

そうして彼は愛莉の傀儡となり、囚われていない精神で囚われた身体が己の特典を使って神楽の関係者である者たちを殺す場面を見せつけられた。

精神は嘆く。何故ここまでする必要があるのかと。

身体は泣く。愛莉の命令通りに動く傀儡と成り果てて、嘆く精神に引かれる様に。

無表情で涙を流しながら、ただ彼は自分が壊した教会を見下ろしていた。

「……やれやれ、もしもと思いましたがまさかここまでするとは」

その時、瓦礫が動きそこから一人の聖職者が現れた。金髪でメガネをかけている神父が困った様な顔で服を叩きながら無傷で這い出して来たのだ。更に退かされた瓦礫の下から半球体の砂が現れる。砂が崩れるとその中には眠っている二人の少女と目元に濃い隈を作り、大きな瓢箪を背負った桃色の髪の少年がいた。

「あくあ、完全に壊されましたね……ここまでやられたら修理じゃなくって建てた方が早そうですね」

「俺を残らせたのもこれを見越してのことか？」

「ええ、逆恨みでここを襲われる可能性が否定出来ませんでしたから。テレジアとはやてを守るために残らせました。貴方はそのまま二人を守っていてください、私が片付けましょう」

神父は教会のことを残念そうにそう言いながら桃色の髪の少年に指示を出し、空中にいた少年に目を向けた。

「貴方が、これをやりましたね？」

「……」



「答えない……いや、答えられない？ 操られているのですか？」

神父の問いに答えずに少年は片手を神父へと向ける。その一動だけで神父に向かって雷が落ちた。

少年の得た特典は煌天雷獄<sup>ゼニス・テンペスト</sup>、とある作中に置いて神滅器と称された十二しかない武器の一つ。その効果は天候と自然属性の操作。科学によって自然現象が証明されていなかった太古では天災のことを神の怒りと恐れていた。それはそうだろう、脆弱な存在である人間では天災には備えるだけで逆らうことは出来ない。ただ身を竦めて天災が納まることを祈るしか出来ない。神の怒りと称される天災を意のままに操る事ができる少年はまさしく『神の御使』と呼ぶにふさわしかった。

数億Vの電流が指向性を持って神父に落ちる。それだけでは止まらない。さらに身を切り裂く様な竜巻が、成人男性よりも巨大な電気が、神父へと向かっていく。これは遠くからこの光景を見ていた愛莉の指示だった。愛莉は神父の異常なまでの硬さを知っている。だからこそ過剰なまでの攻撃を向ける。

それを知らない少年は嘆くことしか出来なかった。

もう良いだろう、もう辞めてくれ、自分に人を殺させないでくれ、もうこれ以上、人を傷付けさせないで。

誰にも届かない慟哭は、少年の目から流れ出る涙で証明される。自分の力で自分の望まないことをさせられる事を嘆き、少年は望んだ。

——誰か、自分を止めてくれ。誰か、自分を殺してくれ。操られて、誰かを傷つけてしまうこの道化を、誰か止めてくれ。

しかしその望みは誰にも届かない。魂の慟哭など誰の耳にも聞こえない。少年の望みは叶う事なく、神楽の関係者を殺すための傀儡として動く未来しかない。――はずだった。

lll Me<sup>親</sup>in<sup>愛</sup> lieber<sup>なる</sup> Schwan<sup>白鳥</sup>.  
den<sup>指輪</sup> Ring<sup>を</sup> sie<sup>の</sup> Horn<sup>角笛</sup>,  
du<sup>と</sup> ihm<sup>と</sup> gebest<sup>こ</sup>.  
Schwert<sup>の</sup>,  
Schwert<sup>と</sup>

天災の轟が木霊する中で、祈りの声が聞こえた。その祈りを捧げているのは他でもないあの神父だ。彼は、生命の存在を否定する様な天災の中で祈っている。

ihm<sup>彼に</sup> Hilfe<sup>救い</sup> schenken<sup>を</sup>,  
Horn<sup>角笛</sup> soll<sup>は</sup> in<sup>危</sup> Gefahr<sup>に</sup>

ihm<sup>勝利</sup> Sieg<sup>を</sup> verleiht<sup>る</sup>,  
Kampfdies<sup>恐怖</sup> Schwert<sup>怖れ</sup>

er<sup>恥辱</sup> mein<sup>と</sup> doch<sup>こ</sup> beidem<sup>指輪</sup> Ringe<sup>は</sup> soll<sup>か</sup>

それはそうだ、彼の者は人ではない。水銀の蛇に与えられた永劫破壊の法に触れ、その身を魔に堕とした邪なる聖者と呼ばれた存在である。

思い出す、あの時の自分を。彼の黄金の獣に膝をついて同じ渴望を幻想していた時の自分を。

auゴットs Schフmaリーchト undが Not徳 beぶfreit!よ  
derこ einのst私 auのchこdicとhを

蛇の永劫破壊などこの世界では使うつもりは無かった。だが、自身が愛すると決めた神楽が彼らによって囚われ、愛するテレジアとはやてが危機に晒された今では、その様な物は無価値に等しい。

愛する者たちを守る為に、ヴァレリア・トリファは今一度幻想の渴望を溢れ出した。

創造Briah——  
Vanahheimr Goldene Schwan Lohengrin  
神世界へ——翔けよ黄金化する白鳥の騎士

ヴァレリアの胸から槍の穂先が生える。そして彼に降りかかっていた天災の一切が掻き消された。

これは彼の黄金の獣が振るっていた聖人を貫いた至高の聖遺物。彼と同格の存在であるならばまだしも、人の身で再現される神の怒りなどこれの前では兎戯に等しい。

そして至高の聖遺物が放たれた。光さえも置き去りにする速度で飛翔する槍は少年の胸を貫き、立ち込めていた暗雲さえも払う。

——ありがとう。

ただ使われるだけの傀儡の存在から解放された少年は自分を殺し

てくれたヴァレリアに感謝の言葉を送った。それは天上の存在の気まぐれか、聞き間違いかと思う程にか細い音でヴァレリアの耳に届く。

「……Amen」

それを聞いたヴァレリアは迷う事なく、傀儡であった少年に安らかな眠りを願って祈りを捧げた。

## 第17話

ヴァレリアが転生者を聖槍で屠っていたのと前後して、プレシア・テスタロッサの拠点である時の庭園では戦闘が行われていた。

十字架の刻印が施された黒銃を撃つのは信、装填数である六発を一息の間に放つと瞬きよりも速く装填を済ませてさらに撃ち放つ。

「スウウウウウパアアアアアア銀色の足イイイイイイイ!!! スペシャアアアアアル!!!」

その近くで蹴り碎いているのは信が雇っている転生者の箒。彼は足に紫の装甲を着けて飛び蹴りを全力で放っていた。

「クソツ!! 予想よりも数が多すぎるだろうが!!」

「文句言ってる暇があるならその分働きやがれ!! 金払わねえぞ!!」  
「わあつてるよ!!」

二人の声から感じられるのは苛立ちと焦り。彼らの目的は転生者たちに捕らえられた神楽を救出する事なのにそれを阻む存在がいるからだ。

その正体は機械兵。プレシアが護衛目的で製造した命の無いカラクリ。その存在があることは二人は知っていたのだが……予想していたよりも数が多く、そして強い。その理由はプレシア側に組していた転生者。その転生者の得点は機械の改造に関する事でそれでプレシアの機械兵を強化、増強していたのだった。

二人の顔からは僅かながら疲労の色が見えるものの傷はついていない。倒せない強さでは無いのだがそれでも数の暴力に徐々に押し

れてしまっていた。一を倒せば二現れる、二を倒せば四現れる。滅るよりも早く増えていく機械兵の存在が余計に二人から余裕を奪う。

「……二人とも、退がって」

埒があかないと考えたのか二人に下がる様に指示して前に出たのはリザ。いつも着ているシスターの服装では無く威圧感を感じさせる軍服を着ていた。女性用らしく足を曝け出す様に大きく開けられたスリットからは男を誘う様な艶かしい足が見える。そして腕には黒円卓が刻まれた腕章が付けられていた。

この服になったのはリザなりの意思表示だと言えよう。神楽を愛するシスターとしてのリザ・トリファとしてでは無く、かつて魔人の集団に属していた頃のリザ・ブレンダーとして戦うという決意の現れ。水銀の蛇につけられた大淫婦バビロンの魔名を思い出しながらリザは詠った。

Und Gei霊stと und Kがerper動sich beのwegenも

Und G神ott selbはst ha自t sらich zuあeuなch geneたige許tへ

komそmtしte z参uれmei私neの Lie愛besのmah晩l餐

YetziraYrahet PallidaP morsMorrss

形 成 蒼褪めた死面

暗闇に一つの仮面が浮かび上がる。無機質な画面でありながらそこから放たれる威圧にはどこか死を感じさせるとい矛盾があった。

実際それは間違いでは無い。リザの永劫破壊エイワイヒカイトの聖遺物は蒼褪めた死面、それは彼女のかつての業によって死んだ赤子の死体の皮膚から作られた仮面だからだ。本当ならば目を逸らしたくなる程に深い業であるが、リザは決して目を逸らさない。彼女はこの業を受け入れると決めているし、もう二度と同じ事を繰り返さないと誓っているのだから。

そして暗闇からそれは現れた。顔は蒼褪めた死面を着けているのでわからないが常人を遥かに超える巨体の肌色は生きていとは思えない土気色だった。そう、それは生きてはいない。その魔名はトバルカイントバルカインを喰らう者、かの黄金の獣が振るう聖槍のレプリカを創り出した事で呪いを背負う事になった一族の成れの果て。偽槍に魂を喰われながらに解放される事の無い死体だった。

「■■■■ー」

命亡き死者が動き叫ぶという矛盾。そのカラクリはリザの蒼褪めた死面にある。彼女の形成の効果は死面を着けた死体の操作。死者の冒涇と蔑まれるだろうが彼女にとってはその蔑みの声などどうでも良かった。

「■■■■ー」  
「!!!!!!」

トバルカインが吠え、手に持った身の丈程の巨大な剣を振るい機械兵を粉碎していく。互いに命の無い使われるだけの存在ではあったが直接指示を受けているトバルカインの方に軍配が上がったようだ。信と箒が砕くよりも早く、出撃している機械兵を塵にしていく。

「すっげえ……」

「……」

箒は純粹にトバルカインの戦闘能力に驚いている様子だったが信はトバルカインを操っているリザに恐怖していた。リザの顔は無表情ながらもその美貌は失われていない。それでも彼女から感じられる感情は憤怒、その姿は我が子に害をなされて怒り狂う鬼神母子を連想させた。

「(こええ……)」

リザのことを怒らせないようにしようと誓う信だった。

トバルカインが機械兵を破壊しながら進むと階段が現れた。その階段は上に向かう物と下に向かう物の二つに分かれている。

「――別れましょう、私は上に行くわ」

「あいよ、俺らは下だ。箒、ついて来い」

「了解!!」

そしてノータイムで決めてリザとトバルカインは上に向かう階段を登り、信と箒は下に向かう階段に飛び込む。これは上と下のどちらに神楽がいるのかわからないために取った手段。本来なら別れることなく進むのが良いのだろうがもしも向かった先に神楽がいなければ悪戯に時間を消費するだけになる。リザと信は互いの心配をそんなにしていなかった。リザには機械兵を簡単に粉碎するトバルカインが付いているし、信は箒と一緒になら機械兵にも遅れを取らないと確信しているからだ。

彼らの目的は神楽の救出、故に迷う事はなかった。



そして十分程時間が経ってから、新たな来訪者が時の庭園に現れた。彼らは時空管理局という集団に所属している魔導師で、犯罪者であるプレシアを逮捕するためにやって来たのだ。その中には地球出身の魔導師である高町なのは、プレシアの娘であるフェイト・テストア、そして転生者たちが数人混じっている。

「これは……」

この集団を指揮している執務官のクロノ・ハラオウンは時の庭園の惨状を見て唾然としていた。目の前にあるのは粉碎されて動くことの無い機械兵の残骸。天井が見えない程に高い廊下には無数の弾痕と何かで斬ったような跡が残っていた。

「……誰かが先に来ているのか？」

この痕跡は間違いなく戦闘の起こった後だという証明。そのことから機械兵に迎撃されるような人物が自分たちよりも先に来ているとクロノは予想した。

「……なのはとタケル、チットとサトリは上に向かってここの動力源の封印を。僕とフェイトと夜行と凧は下に向かってプレシアの捕獲に行く」

「うん!!」

「ああ!!」

「へーい」

「分かりました」

「はい」

「心得た」

「了解!!」

彼らはクロノの指示に従って時の庭園の動力源がある上に向かう者とプレシアを逮捕するために下に向かう者とに別れる。

本当ならまとまって行動しなかったのだがプレシアの目的を知った今ではそんな悠長なことを言っていられなかった。プレシアからの次元跳躍魔法で気絶したフェイトを起こして尋問した結果、プレシアがアルハザードに向かおうとしていると判明したのだ。それはお伽噺で語られるようなあやふやな存在で、本当にあるかどうかも怪しい。だがプレシアはあると確信している様だったのだ。そんなものがあるとすれば次元の狭間にあるとしか考えられないと智者である夜行は言った。普通では辿り着けないだろうが……ジュエルシードを使って次元震を起こし、無理矢理に穴を開ければ可能性があるかもしれないと言ったのだ。そんなことをすれば今現在存在している世界にどんな影響が及ぶか分からない。だが決してプラスにはなることは無いだけは理解できた。

なので時の庭園の動力源を停止させ、僅かでも次元震の規模を抑えようとしようとして二手に分けたのだ。

「(しかし……)」

クロノは付いてきているフェイトをチラリと見る。本当ならば実行犯である彼女をこの場に連れてくることはしたくなかったのだが時の庭園の案内役にしようとして夜行を除く者たちから提案されたので仕方なく連れて来たのだ。デバイスを持っていていつ裏切るかわからないフェイトだったが執務官である自分と夜行と風がいれば鎮圧に問題無いと判断している。ただ、夜行はどこか快樂主義の嫌いがあるので数として数えるのは不安になるのだが。

「(それに……この胸騒ぎはなんだ……?)」

クロノの心中にあるのは訳の分からないざわつき。何があるのか分からないがこの先には何か良くない出来事が待っているとクロノは予感していたのだ。もつとも、そんな何も確証の無いことで足を止めるわけにはいかないとクロノはプレシアの元に向かっているわけだが。

どちらにしても、何にしても、この物語は確実に終わりにへと向かっている。

## 第18話

「……どうやら外れのようなね……」

時の庭園の最上階まで来たリザは自分の選択が間違っていたことを悟った。そこに会ったのは駆動音を立てながら稼働している巨大な装置、ここに来るまでの道に会った部屋はすべて調べている。つまりここに神楽がないということは彼は下にいることになる。

「カイン」

「■■■■■■……」

リザが指示を出すとトバルカインの持っていた大剣から漆黒の雷が程走る。これは八つ当たりに近い行為だが、神楽を攫った連中の足を引くことが出来るとリザは確信していた。そしてトバルカインの剣が振るわれ、それと同時に漆黒の雷が指向性を持って装置に向かう、装置には防御の為の障壁が張られていたが大隊長クラスと双首領の二人を除く黒円卓の中で最強と言われているトバルカインの前では紙同然の強度でしかなかった。

障壁が音を立てて割れ、装置が破壊される。時の庭園の動力源の破壊された瞬間だった。

ここにはもう用は無いとリザはトバルカインを引き連れてこの場を去ろうとする。その時、

「やっきの音は何!?!」

「っ!?!誰だ!?!」

「女の人?」

「ぜえ……ぜえ……」



「ハツハツハ!!遅いぞジン!!」

「信だつて言ってるだろうがこの野郎が!!」

下に向かった信と箒は罵り合いに近いことをしながら走っていた。その進行を阻む物は無い。始めに現れた機械兵はそれつきりで全く姿を見せなくなったのだ。

「大体テメエが道間違えなけりやあもつと早く着けただろうが!!」

「それに関してはマジ悪いと思ってる、スマン」

「誠意が感じられない、後で俺が教会でされたことをすつからな!!」

「何されたんだ?」

「ケツに野菜ぶち込まれた」

「WRYYYYYYYYY!!」

絶叫している箒の姿を見ても信の心中は晴れない。何故なら箒が先走った行動を取った為に大幅な時間ロスをしてしまったから。少なくともそのせいで二十分は時間を無駄にってしまったのだ。それだけあれば神楽を見つけ出し、ここから逃げる事が出来たのを考えるとかなり手痛いロスだ。

「……なあジンよお、本当に嬢ちゃんは無事なんだろうな?」

「信だ!!……神楽ならまだ無事なはずだ。プレシアの目的はジュエルシード、それならジュエルシードと融合している神楽を殺すのは下策だ。アルハザードに向かうにしても生きたままの状態で向かおうとするだろうが……プレシア側に付いた転生者たちが余計なことをしてないことを祈るしかねえな」

信の中で危惧しているのは転生者たちの行動。フェイトと良い関

係になろうとプレシア側に付いた転生者たちが所構わずに嫌悪をばら撒いている神楽を前にして余計なことをしていそうだと考えているのだ。そうなった結果、あの神楽と初めて出会った夜のような状態になってしまえば信だけでは止めるのは難しいだろう。

新たな階段を見つけて飛び降りるように階段を降りているその時——

A A A A A A A A A A A A A A A A A  
A———!!!

咆哮が、時の庭園内に響き渡った。

「……………ここだな」  
「うん……………」

時の庭園の最深部、プレシアがいると思われる場所にクロノたちは





「ガハッ……」

そして部屋の中央には二つの人影。一つは赤い髪に黒い肌、そして背中から禍々しきを感じさせる刃を幾つも生やしている少年。もう一つはその少年の片手で首を絞められ持ち上げられている女性。ロープレシアテスタロッサだった。

「ロー母さん!!」

「待てっ!!」

「ダメだ!!」

その光景を見たフェイトが飛び出そうとするのをクロノが手で制し、風が後ろから羽交い締めにして止める。この光景を見ればあの少年がこの惨状を作ったのだと推測できる。だとするなら下手に飛び出したところでこの部屋にいる肉片の一部になる未来しか見えない。

だが、その努力も無駄に終わる。少年の背中から生えていた刃、それらすべてがプレシアに向けられロー腹部に突き刺さった。

「ローアリ、シア」

そして刃が力任せに外側にへと引っ張られる。まごう事なき致命傷、プレシアはクローンではなく、最愛の実子の名前を呟きながら逝った。

そして少年の行動はプレシアを殺したただけでは治らない。外側へと向けられた刃が戻ってプレシアの首を斬り落とす。床にプレシアの死体がついた時には頭部、上半身、下半身の三分割。

そして少年は迷うことなくプレシアの頭部に向かって足を振り上げてロー踏んだ。



貫して少年の首を刈り落とす未来を幻視する。

「……いかな、これは」

フェイトが飛び出したのと同時にここまで嘲笑う様な笑みしか浮かべていなかった夜行が動いた。懐から何かが書かれた札を数十枚取り出してクロノと凧を巻き込む様な形で自身の周りにばら撒く。

「AAAAAAAAAAAAー」

そして少年が振り返り、フェイトを、その奥にいたクロノたちを視界に捉えた。

その瞬間、クロノたちを重圧が襲う。息が辛い、身体が動かし難い。まるで突然水中にでも引きずり込まれたかの様な錯覚に陥る。

「これでも抜かれるか……この陣から出てくれるなよ？ 出ればあの様になる」

夜行が示した先にあったのはフェイトの姿。だがフェイトはバルデイツシュを振りかぶったままの状態で停止していた。いや、良く注意して見れば僅かに動いている様に見えなくもない。

そして少年の背中の中の刃が消える。再び視認出来た時には……細切れになったフェイトの姿があった。恐らく自分が細切れにされたことに気づかずには逝ったのだろう。フェイトだった肉片は床にぶちまけられた。

「何が……起きたんだ？」

「停止……いや、遅滞だな。恐らく視界に入れた存在を遅滞させ、その分己が速くなったのだろう。いやはや、よもや無間と同じ能力を持つ

者と出会えるとは――僥倖と言うべきか？」

フェイトが殺されたことに唾然としている風、少年が何をしたのかを冷静に判断しようとしていたクロノを背後に夜行はその淡麗な顔に再び嘲笑の笑みを浮かべていた。

「やっ」

夜行が自身の敷いた陣から出て行く。守る陣から外に出たことで少年の遅滞の法則が夜行に向けられる。が、新たな札を前に出したことでその法則に抗う。

「飲み込まれてた……違うな、自ら堕ちたのか？まあ良い、どちらにしろ貴様はとても興味深い」

「Ruuuuuuuuuu――」

遅滞の法則に抗う夜行を少年は警戒する。それに対して夜行は嘲笑の笑みを崩す事無く新たな札を取り出して少年と対峙する。

「この身は暁あかつき夜行と申す。さあ……貴様は私にとっての蟬せみに相応しいかな？」

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA――  
!!!」

大紅蓮の化身と化した少年――神楽に夜行は名乗りを上げる。ここに、無間の赤子と曙光の一角の名を持つ者との死闘が始まる。

## 第19話

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」  
「あつはっはっは!!!ほうらこちらだ、追いつけてみせよ!!」

凍結された時間の中を風を切りながら駆けるのは無間の力を宿した神楽。己が法則で止まらない夜行に追いつき腕と背中から生えた刃を伸ばす。

「トホカミニニミタメ  
吐善加身依美多女——被い給え清め給え——  
かんごんしんりそんだけん!!!  
寒言神尊利根陀見!!!」

夜行の周りに呪の書かれた札が張り巡らされ、二十にも及ぶ次空断層が発生する。これが神楽の法則からクロノたちを守った仕掛け。一時的にその空間をこの世界から切り離すことで神楽の発言した遅滞の法則に抵抗してみせた。それでも誤魔化せない程の実力の差があるのは事実、如何に世界から切り離れたところでそれは抗う程度の効果しか無く完全に逃げ切れている訳ではない。

神楽の手と鎌が次空断層に触れ——拮抗も見せずにガラスの様に砕け散る。次空断層の防御と共に衝撃を相転移する絶対防壁も展開していたがそれすらも力任せに貫かれる。

「———俺!!!」

すべての防御が抜かれる直前に神楽の眼前に一枚の札が現れて夜行の呪と共に爆ぜる。それは神楽からすれば飛び散った火花程度の熱量しか感じさせないものだったが札の爆炎により神楽の視界が封じられ遅滞の法則を遮る。

その隙に夜行は新たな次空断層を展開しながら距離を取っていた。

彼らの戦いの場は時の庭園から飛び出し、次元の狭間と呼べる空間に移っていた。夜行は己が編み出した術によって宙を舞い、神楽は足場となる空間を遅滞の法則で凍てつかせることで跳んでいる。

「……ふむ、私の力を十とすれば……貴様の力は五千、いや万と言ったところか」

夜行は俗に言う天才と呼ばれる類の人間である。己の評価は間違えないし、例え格上の相手だとしても桁一つなら上なら打倒、桁二つ上であっても戦闘不能、もしくは封印することが出来る。その夜行が自分のことを神楽と比べて十と称したのだ。

だが、絶対的な実力差があろうとも夜行の顔からは薄ら笑いは消えていない。勝ち目などご都合主義の者でも無い限りは誰も望めないであろうこの絶対的な差。だが、夜行はタダで負けてやるつもりは無かった。

「さて、貴様は如何様にして堕ちた？絶望したか？裏切られたのか？それとも……怒りか？」

「AA!!!!」

夜行の言葉を掻き消すようにして神楽が吠える。それだけで次元断層の防御が幾つか砕け散った。特別何をした訳でも無い、ただ格が違いすぎるが故に神楽の叫びでさえ夜行からすれば攻撃に等しいだけだ。

「凶星かな？そうかそうか、彼奴らに何か大切な者らでも傷つけられたのか？あの場には己のことしか考えぬ天狗道の住人のような輩が

いたであろうからな」

暁夜行は転生者である。だが他の転生者とは違い、自ら進んで転生した訳では無い。生前天才と呼ばれていた彼は多くの偉業を成し遂げてきた、それを見たとある神がこの世界を見る為の端末として彼のことを強制的にこの世界に送り出したのだ。

陰陽師の家系として生まれ、夜行と名付けられた。そこで教わった術は前世では無かったのも彼の興味を非常に引いた。だが、それだけだ。天才であるが故に家に伝わる秘術を容易く修得し、新たな術を十にもならぬ年頃で作り返す。それは普通の人間からすれば天才を通り越して化け物と認識される行いだった。

だから彼は望んでいるのだ。己がただの天才であると、化け物と呼ばれるこの身でも乗り越えられぬ様な存在がいることを、そしてその存在を乗り越えてさらなる高みへと至ることを。

だから夜行は蟻が蟬の死骸を運ぶのに例えて、自らを蟻と形容せざるを得ない強大な好敵手を求めた。そして目の前に、蟬と思わしき存在がいる。圧倒的劣勢の中でも夜行の内心は高揚していた。

夜行の背後に巨大な曼荼羅が浮かぶ。それは夜行を中心に立てた一つの世界、彼の定めた法則で支配された一つの宇宙。独立した一つの世界とも言えるそれは神座に辿り着いた存在から太極と呼ばれる物だった。だが、定めた法則で支配されたはずの太極だが夜行のそれには色……いわゆる指向性が無かった。それは夜行が己の色を理解しないままにこの頂きに至ってしまった証拠。だからこそ、夜行は無形の太極を染められる程の好敵手を望んでいる。

「ざんざんびらり、ざんざんばり、びらりやびらり、ざんだりはん  
つくもふしよう、つかるもふしよう、鬼神に王道なし、人に疑い

なし

総て、一時の夢ぞかし

ここに天地位を定む

八卦相錯つて往を推し、来を知るものは神となる

天地陰陽、神に非ずんば知ること無し」

夜行にしか出来ない夜行だけの咒を紡ぎ出し、それに合わせて太極が揺らめく。すると太極がその形を変えて新たな形にへと組み替えられる。太極の中心から伸びた一筋の光が次元の狭間に穴を開けて新たな空間にへと繋げる。そして夜行が躍らせる十指が虚空に光の尾を引いて太極を何層にもなる立体の大曼荼羅へと形を整える。

太極により開けられた穴は徐々に広がっていき、直径数キロ程のサイズになるまで広げられた。最後に、咒力の密度は幾何学的に膨れ上がり、咒法が励起される。

「計都・天墜——我が蟬となる者なら、この程度超えられるであろう？」

そして開いた穴から夜行の呼びかけに答えるかのごとく、計都彗星の威容が宙の果てから燃える大火球と化して迫り来る。呼び出された計都彗星は彼らの近くで漂っている時の庭園よりも一回りは大きい。一個人に対して使う術にはあまりにも大袈裟すぎる。

だが、ここにいるのは餓鬼道の後押しを受けて至った無間の赤子、この程度で揺るぐ存在では無い。

「Je<sup>血</sup> v<sup>血</sup> eux<sup>血</sup> le<sup>血</sup> s<sup>血</sup> ang<sup>血</sup>, s<sup>血</sup> ang<sup>血</sup>, s<sup>血</sup> ang<sup>血</sup>, et<sup>血</sup> s<sup>血</sup> ang<sup>血</sup>  
Don<sup>ギ</sup> non<sup>ロ</sup> n<sup>チ</sup> s<sup>ニ</sup> le<sup>注</sup> s<sup>ゴ</sup> ang<sup>ウ</sup> de<sup>飲</sup> g<sup>ミ</sup> u<sup>物</sup> i<sup>を</sup> l<sup>血</sup> l<sup>血</sup> o<sup>血</sup> t<sup>血</sup> i<sup>血</sup> n<sup>血</sup> e<sup>血</sup>  
P<sup>ギ</sup> our<sup>ロ</sup> g<sup>チ</sup> ue<sup>ン</sup> r<sup>ン</sup> i<sup>ン</sup> r<sup>ン</sup> s<sup>の</sup> e<sup>の</sup> ch<sup>乾</sup> e<sup>乾</sup> r<sup>乾</sup> e<sup>乾</sup> s<sup>乾</sup> s<sup>乾</sup> e<sup>乾</sup> d<sup>乾</sup> e<sup>乾</sup> l<sup>乾</sup> a<sup>乾</sup> g<sup>乾</sup> u<sup>乾</sup> i<sup>乾</sup> l<sup>乾</sup> l<sup>乾</sup> i<sup>乾</sup> s<sup>乾</sup> t<sup>乾</sup> i<sup>乾</sup> n<sup>乾</sup> e<sup>乾</sup>  
J<sup>欲</sup> e<sup>欲</sup> v<sup>欲</sup> e<sup>欲</sup> u<sup>欲</sup> x<sup>欲</sup> l<sup>欲</sup> e<sup>欲</sup> s<sup>欲</sup> a<sup>欲</sup> n<sup>欲</sup> g<sup>欲</sup>, s<sup>欲</sup> a<sup>欲</sup> n<sup>欲</sup> g<sup>欲</sup>, s<sup>欲</sup> a<sup>欲</sup> n<sup>欲</sup> g<sup>欲</sup>, e<sup>欲</sup> t<sup>欲</sup> s<sup>欲</sup> a<sup>欲</sup> n<sup>欲</sup> g<sup>欲</sup> l<sup>欲</sup> l<sup>欲</sup> i<sup>欲</sup> s<sup>欲</sup> t<sup>欲</sup> i<sup>欲</sup> n<sup>欲</sup> e<sup>欲</sup>



神楽の口から静かに語られるのはギロチンのリフレイン。そして神楽の背後に全身を拘束具で縛られ、目隠しをされた3メートルを超える瘦躯の人物が現れる。

「マルグリット・ボワ・ジュステイス罪姫・正義の柱!!!」

神楽の叫びと共に瘦躯の背後から神楽の背中から生えている刃と似通った瘦躯の身の丈を超える大きさ刃が複数現れて射出される。だがそれと同じなのは見た目だけ、それに宿った神威は比べ物にならない。

夜行の放った計都彗星をまるでバターの様に切り裂きながらその奥にいた夜行を次元断層の防御ごと切り裂く。生きているのは運が良かったとしか言いようが無い。僅かにでも立ち位置がずれていれば夜行は肉片にされていた。

夜行は痛みと喜びで顔を歪ませながら神楽を見ようとし「遅滞の法則に囚われた。抵抗していられた次元断層の防御が切り裂かれたのだから当然の結果であると言えよう。」

「シーク・イートウル・アド・アストウラー」

遅滞の法則に囚われた夜行に向かい静かに呟く。それに呼応する様に瘦躯の口が開き、高密度のエネルギーが収束されていく。遠目から見てもその危険性が理解出来る。神楽はそれを夜行に放とうとしていた。

「セクウエレ・ナートウーラアアアアムツ!!!」

そして放つ為の最後の一文が語られた瞬間、瘦躯の頭部目掛けて光

の矢が飛んできた。神樂の知覚外から放たれたそれに反応出来る訳がなく瘦躯に命中、砲撃は見当違いの方向に放たれた。

「――神樂あああああああああああ  
!!!!!!」

そして、時の庭園から友人の声が聞こえた。